

り天地間のもの本來神聖のものにあらずとの念生せしより、事々物々皆實驗的方法の研究を許すに至り、其神とする處のものは是等のものを離れて何處にか他に有するものとしたればなり。彼の運命論の如き極一般的の思想は此時に想出されしが、又不變の自然法則の觀念の根底を爲すものと謂ふを得む。天地間の諸現象は當時に在りては、今日に於けるよりも一層複雑の觀を呈せしとの事は動かす可からざるが、多神教は之に對し種々雜多の神々を生出し、以て外界の整齊と一致せざるものたらしめたり、然かも事實は然らざる可からず、由りて茲に一の不易の神を生出し、是れが他のものに對し至上權を掌握せるは他の神には皆自身が獨立を有せる上に認容せざる可からず、之れ「運命」なるもの、觀念にして多神教とは離る可からざるものなり、之よりして遂には一神教となる、斯くして自然法則の不變との事に緒を爲したるものは此多神教なりとす。

人類の思想が最統一的方法を得、又教義に於て同性なるを得しは此時に若くなし、一神教の時にありては既に一方に形而上學的精神の來るあり、又今日にありては實證哲學成ると雖、未だ以て完全のものとならず、彼の時こそ徹頭徹尾神學の見

地よりして説明し盡されしものなり。

更に又特別にして且直接の事よりして、之れが科學的精神を昂進せしむるに功ありしを見る。即ち幾多の小説的の觀念、換言すれば人の運命を判するとの如き事よりして、鳥群の飛び工合とか、犠牲になるもの、内臓を見るところかの事に注意するよりして、人をして愈々實驗的に觀察的精神を養はしむ。是れ即ち今日の科學的精神の基礎となりしなり。

二、哲學と詩歌とを混同するものから、詩歌を以て人間社會草創の時期に際し、之れが統治の智的基礎として當時に於ける之れが勢力を過重するの弊は往々にして之れあり。併し實は二者常に別のものにして、野蠻時代にありても、神學の方勢力を占め詩歌は唯之れを補助せしに止まる、ホメーロスは哲學者にあらざりしも詩歌を善くしたり、プラトーンは其哲學を詩的に潤飾して人に便益ならしむ。古往今來詩歌を以て統治の基礎とせるもの無し、必らずや哲學の存在を豫想す、拜物教の時にありては、萬物を人格視したりしかば、天地に對する美術の隆盛なる之れより甚しきは莫し、蓋し當時は感情的方面の智的方面に比して一層に盛なりしな

ればなり、多神教に至りては、巧にも無機物界に變態説カモルツトスを案出して之に對したりしが、其詩的情感の猛烈に至りては彼に比す可くもあらじ。併し美術の本來の領域は人類の道德的行爲にあり、多神教之を事とす、之に比すれば彼の拜物教の試みし茫漠たる範圍も、ものかは。

多神教の特色なる想像を獎勵するの事は、美術を進歩さするに大功ありたり、之れ理性を超越するの事、彼の拜物教が人類經驗の初期即ち感情に由りし如く、之は其第二期として當然生ずるもの、斯く多神教が靈的機能を養ふの事が、却て之をもて詩的創造と誤解を來す所以なり。多神教の時にありては、種々の抽象的の事物をば詩的想像に由りて、衣するに衣服、風習、歴史等の夫々に適當のものを以てしたり、拜物教にては神々は皆具體的のもの故、此想像力の働く處無し、又之にありては主として天然の事物にのみ係はりしものから、人事の方面に至る事は非常の困難の後にてありし、之に反して多神教にありては、人事の方主としてなりしなり、且又多神教にては、美術が其主題とするものに最通俗的のものを與へしかば、其發達には大に益ありしなり。

是れは之れ多神教が人生に貢獻せる處のものにして重大なる處、抑も靈的機能は道德的と智的との中間に立ちて是等を結合し、以て渾一體となるなり。殊に理性の未だ充分に發達せざるに當りては、此想像に由り美術に訴へ、以て精神的生活を惹起さしむ、もとより今日の實證哲學時代にありては理性に由る故、此事も必要なりと雖、拜物教時代に感情が主要なりしが如く、多神教時代にありては此想像力の活動に待つ事多大なりしなり。況や哲學者も美術家も均しく人生を研究するに於てをや、成程一は分析的に初まり、他は直接に綜合的に初まるの差ありと雖、畢竟同一物の研鑽の方面を異にするに過ぎざるが故に、其思想に於て同一のものあらざる可からざるや必せり。

三、其工業的方面に及ぼせる影響に就きては、之れは拜物教の後を承けて、一層其勢力を多大ならしめしものあり、此時にありては神體を實體より別離せしめし故、在來神聖を汚すものとせられし事をも敢て爲すに至る。同時に僧侶制生じ、幾多の相衝突する要求を解釋せり。忘る可からざるは、此多神教時代の工業は主として軍事のものにあり、當時は戦が主たりしと又改良の容易なりしとに由り、他の

ものに擡んで、人心を傾注したり。

最後に之れが社會的適合如何を二方面よりして攻究せん。(一)政治的(二)道德的之れなり、就中一の方主要なり、二に至りては此教は神學的哲學中最不完全のものたり。

抑も多神教の僧職は學問の研究に充分の餘裕を得る階級にして、此時初めて生じたるものなり。然らば此者が當時の社會に及ぼせる政治的影響如何。尤も古代にありて、實際的と精神的の兩方面に亘りて政治的權力の萌芽を見るなるが、前者は主として軍學組織に由る可く、後者は其種族の傳説、經驗せる處のもの等を承繼して後昆に傳ふるもの、即ち老成人の知識に待つ事多し、之れを爲す僧侶の事、之に由り幾多の家族結合せられ、社會的團結を爲すなり、蓋し僧侶の爲す事と雖、人生死後に於ける事よりも、此世に於ける諸々の事を判するよりして、一般人民の信頼を受くるものたり。

既に輿論を形成し、又特に思辨的階級を獨立せしめしが、又其神を崇拜するの事は克く當時の人心に適合したり、斯くして種々の祭祀を施して異なる部落間を結合せしめ、又以て美術の進歩に貢獻する處あらしめぬ。

以上社會組織の受働的方面より更に轉じて能働的方面に轉せむ。先づ述べべきは當時は軍隊的との事之れなり、之れ嘗に時代の傾向とのみにあらずして、其政治組織をして持續して又進歩あらしめむ爲には、取らざる可からざるの形式たり。當時の社會にありては、戰爭極めて必要にして、又之に由り優者が劣者を併すを得たるにて、之を他にしては他の方法無かりしなり。或は又宗教的の分子を包含せざるが如き觀ありと雖、多神教の時に至りては其神體が抽象的となり、一般的性質を有し來りし事、既述の如く、拜物教の如く個々のにあらず、而して又一方には己れの敵國の神は己等のと異なるありて、此くして神體は多少國民的性格を帶び來る、乃ち敗者は己れ在來の神を奉ずるを得るも、其力を以て勝者の下に從屬せしめざる可からざるものあり。而して此くの如きは實に多神教にありて初めて之を善くするを得るもの、一神教に至りては普天の下皆同一にして、平和的性質を有し來り進歩せる國民に初めて適するものたり。

多神教制にありては、別に又嚴乎たる軍隊制度を保持するを得せしめしものあり。

り、即ち常に神託其他の事に由りて、上帝と交通し其保護を受くるを得ればなり、又一方には、普通人と雖、功績の顯著なるものは、死後神位に陞せて祀らるゝの事は、大人を鼓舞して社會の發達に貢獻する處ありたり。

次に此多神教制全體に亘りて存在する根本的性質如何を検するに、二者あり。

(一) 奴隸制度の存在、(二) 宗教的權力と世間的權力との混同之れなり。是等のもの、有無は多神教時代と一神教時代とを別つ處のものたり。

奴隸制度が古代に於て、缺く可からざるのものなる事は、吾人克く之を知るも、其關係の原理に至りては、之を看過するもの多し。抑も此制度は食人的若しくは殺戮的狀態に次で起り來りしもの、勝者が悉く敗者を戮滅せずして、之に生命を與へて奴隸と爲し、工業に従はしむるの己れ等に益あるより生じたるものにして、之を其れより以前のものに比すれば、もとより一步を進めたりと謂ふ可きなり、斯く平和的事業が奴隸に委ねられざりしならむには、軍隊組織の發達は到底見る能はざりしものあらむ。古代の奴隸制度と近代のと比するに、前者は主従共働的にして、奴隸も其身命を賭するが如き場合少きに、後者のものに至りては、奴隸は唯勞作す

るのみにして主人は安逸して其利を壟斷し、加之、其身に加はる危難の頻々たるものあり。

奴隸制度と多神教との關係に至りては、能く調和的狀態に立てり。拜物教のものにありては、餘りに各個的にして勝者と敗者との間に連絡を附す可くもあらず、而して一神教に至りては、他の極端に走り、四海平等主義にして、此くの如きものを許さず、獨り多神教にありては、兩者の間に區別を設くる丈の差等を有すると同時に、又他には是等をして從屬的關係に立たしめて、統一を附する丈の事を爲し得るあり、是れ其之れに最も適したる所以なり。

更に又古代の社會統治に於て顯著なる事は、精神的權力と世間的權力との二者の同一人に合體せられしに在り、是れ此時代には極めて必要なりし事にして、其分別は近代文明に於て、初めて起りしものなりとす、請ふ之を見む。

中世に於ては、此分別生じたりしが、古代には無かりき、之れの生ずるは、其社會の餘程進歩したる後に初めて之れある事にして、其組織の極めて簡單なる時には、常に一は他の從屬的關係に立てり、其統治する範圍も亦一部分位の狹隘なるものな

りき、然るに中世に至りては、其領域非常に擴大し、政治的方面よりしては、到底己れ等のものと同一化せしむる能はざる程に遠方にあるものも、此精神的方面よりして統一し去らむとの必要よりして、此二者の區別の必要生じたり。

斯くして多神教時代にありては、一神教の特質たる、二權力の分岐を得ず、僧侶にして世間的權力より獨立するの事は調和を害す、多神教の僧侶等は夫々奉任する神々の權限を擴張せんと事を庶幾し、動もすれば争の生ずるなるが、是等をして、擧げて世間的權力の下に額かするに及びて、初めて彼等の間に統一を生じ來るあり。此くの如く、多神教と軍隊主義とは其の歩武を一にするあり、而して遂に之れが壓制主義と變ずるに至りては、實に其弊の赴く處のもの、吾人は唯之れが全盛の時代を見れば足る。

之に次で道德的方面を観るなるが、之は極めて簡單にて事足りぬ可し、蓋し奴隸制度の存存し、精神的と世間的との兩勢力が合同せるが如き時にありては、其の道德の低きこと、一神教の時と到底比す可くもあらざればなり。

道德は、個人的に將た又社會的に考察して、奴隸制度の存在に由り、尠からず害は

る。奴隸は其生殺の權を主人に掌握せられたるものから、家族的に之を考察すれば、主人の欲する儘に其身を處理せられて、其家庭が一夫一婦たる事は唯名のみ過ぎざるあり、又社會的に之を見れば、是等のものに對して殘忍刻薄の行動に出で、爲めに其社會をして極めて冷酷のものとなりしむ。既述の如く精神的權力と世間的のものと混同せるよりして、當時の道德は皆政治の下に従屬せしめられ、道德は之れが手段として存し獨立の價無し、即ち全然軍隊主義にして、其に適するものは可、適せざるものは不可との事あるのみ。

當時の事情を顧れば、斯かる道德主義も亦止むを得ざる事なれども、人類の道德的教育との方面よりして之を考察すれば、もとより極めて不完全のものたるを免る、能はざるなりとは云へ、當時に於て道德の萌芽は既に之を生出するを得せしめしもの、彼の一神教のに比して、之を以て彼に比し、其價の絶大なるが如く爲すは、抑も亦誤れるものと謂ふ可きなり。

即ち其良好なる効果を收めし點を見れば、(一)個人的方面よりしては、軍隊主義を標榜して人々の能働的又被働的精力を盛ならしめ、(二)社會的には愛國の念を強か

らしむ。右は共に拜物教の時に萌芽を發せるなるが、此時に至り最盛となりしなり、もとより此時は外國人に對し慘酷の行を免れず、其圓滿なるは、次で來る一神教に待たざる可からざるものあり。

其最不完全なる點は、家族の方面にあり、併し、一夫一婦の制を確實のものたらしめしは、此時にありとす。

此くの如きをもて、多神教は其缺點多きに係はらず、效果の見る可きもの、尠からざるを見る。最後に之れが人生の進歩に資する處ありし諸形式を考察せんとす、先づ神政組織と軍隊組織の二に分つ可し、即ち前者は主として力を精神界に向け、後者は之に反して力を世間的方面に向けしものなり、後者更に分れて戰勝的のもの、其完成的のものとの二種に分つ可し。斯くして之れ三種に分る、歴史的名稱を以て云へば、埃及式、希臘式及び羅馬式、之れなり、請ふ以下逐次之を觀む。

原始的文明の智的並に社會的要素は、唯僧侶の階級の絶對的統治の下に於てのみ克く擴がるを得るなり、之に先ちて拜物教の發達せるもの、星辰崇拜の如きものにて準備的事業を爲され、遊牧時代と農業時代との過渡の時代にありては、唯此多

神教のみ其社會を進歩せしむるを得るものたり。其一般的性質は即ち階級制度にして、父子同一の職業を承繼するにあり、而して總ての上に立ちて僧侶知識の泉源となるあり、之れもとより戰の爲めに設定せられしものにあらざれば、其最劣等の階級も個人的奴隸の如きものにはあらず、集合的奴僕とも稱す可きもの、之をして全く解免せんは彼に優りて困難たり、今日特に亞細亞諸國に多く、天然の地勢が他國と獨立して存在し得る處に多し、先づ亞弗利加の埃及より初め、カルデア、彼斯然り、又支那、日本、印度の如き皆然らざるは無し。

此階級制度は、其中に不便の包含するに係らず、其時にありては、人類の欲求に最適したるもの、當時未だ教育制度開けず、職業は唯口に由り父子相傳ふるを得しのみ、由りて家傳の職業なるもの、存在、敢て恠むに足らざるなり。

其特色とする處は、理論と實際の分別の生せしにあり、即ち思辨的階級は、大なる威嚴と餘裕とを有するを得しなり、斯くして人は初めて其歸趣す可き方針の大體を定め來る、又美術の如きも大に進歩す、嘗に其人心を奪ふ爲めのみにあらず、宗教の弘道の上に大に資するよりして獎勵されたればなり。社會的には又此制顯著

なる事あり、即ち政治上には固定的なり、内的には僧侶至上權を占め、以下の諸階級を統べ、秩序の整然たるあり、唯危難なるは軍隊の力の生長にあるなるが、之れも統治者が意を用ゐて、外國征伐とか殖民とかを爲さしめて亂無きを得せしむ、道德上には、個人的方面に殊に家族的のものに益あり、蓋し階級制度は唯家族制の擴大せるものに過ぎざればなり、社會的よりは、善く其祖先を尊敬するの事あらしむ。

斯く諸々の資質あるに係らず、此神政政治は常に一定不變の形式を存し、社會の變遷に伴ひて變態するを知らず、其社會をして固定的のものとなりしめたり、至上の階級にあるものは絶対權を掌握し、其位を失はざらん事に百方勞作せるが、扱又己等の進歩を顧みる事無し、斯かる社會にありて、知識の進歩は庶幾す可くもあらず、斯くして終始一定の形式を以て貫き、遂に何等の進歩を見ず。

更に轉じて軍隊的多神教を見れば、此時には智的進歩と社會的進歩との間に差別の生じ来るを見る、之れ在來のものにありては混淆せられし處たり、此智的のものには希臘政治に於て之を見る、之れ埃及と羅馬のものとの中間にあり、彼よりも一層智的にして、之れよりも社會的ならず。もとより、此時代にも軍隊的制度無かり

しにあらざるも、個々のもの其大なる永久的規模は之を羅馬に待たざる可からず、之れ地勢人種の然らしむる處、希臘の地たるや、小都市を以て獨立國を構成し、而して其隣國とは同文同人種にして、遠く之を驅逐す可きにあらず、其行へる戦争の如きも、遂に未だ以て大英雄の腦力を傾くるに足らず、茲に於てか方向を轉じて、知識方面の開拓を事と爲せり。

科學に關しては、此時に當り既に實利を離れて、一向專念に其事にのみ思を凝すを得る階級の出來し爲め、之れが發達を見るを得たり、當時は哲學者も其前の哲學者に倣ひ萬般の事を究めたりしが、忽にして實證的精神の生ずるありて、之れが研究を明にしたり、最初に現はれしものは數學なり、之れ其最普遍的にして、又抽象的なる性質上當然の事とす。此實證的精神の入り來ると共に、此科學的研究に關して特殊のものを生じ、在來の哲學の不確實なる思考と別離したり。斯くして科學者なる階級は哲學者と分離し、直接に此新なる智的欲求を満足せしめんとす。

純粹の哲學的發展に關しては、之れが科學的のものより分るゝ少しく以前に、當時未だ發生的の實證精神の影響を蒙りぬ、當時の形而上學之を證して餘りあり、未

だ天文學則が自然法則を明にするに先ちて人民は一意神學のものより解脱せん事を庶幾し、未だ不完全なる數學的概念の中よりして、整齊の次第を明にせんとす、之れ未だ以て明確なるものに至らずと雖、自然法則に由らむとするものなるは疑ふ可くもあらず。斯くして希臘哲學は科學的精神殊に數學に基礎を置き、成りしものなるを見る、アリストテレスの大事業は實に之れが大紀念碑とも稱す可きものなり、當時未だ人智の不完全なるに際して、科學美術の全般に亘りて巧慧なる判斷を下しぬ。アレキサンドライア學派にありては、哲學を分ちて自然的と道德的との二者と爲しぬ、是れ多神教を斥けて一神教に至るには、必要なる段階たり、併し斯かるものが遂に社會政治の基礎たるに、適せざるは、其全盛時期に於て既に之を見る、即ちソクラテース以來エピクルスに至る迄、組織的に外界の存在を疑ふに至らしめぬ。實に形而上學は斯く迄に科學及び神學より獨立せんと試みしなり。

羅馬の文明は希臘のもの、如く久しきに亘らず、又其成素極めて簡單にして顯著なるものあり、夫々の場合に應じて或は智的に或は政治的に卓然たるものあら

ざる可からず、此兩者はもとより別々とはあらざれども、其主要の行動的方面は此くの如かりし、故を以て、古代にありては諸國が軍隊的活動の盛なるもの無きにあらずと雖、其活動をして充分ならしむる能はざりしものあり、而して次で來りし國は全く之れと正反對のものを示すあり、而して此兩者は同様に中世に入りて合流し去る。其順序よりして之を云へば、智的方面の希臘時代は、もとより軍隊的の羅馬時代に先たざる可からず。如何にも羅馬帝國民は世界的帝國を建設す可き使命を有したるもの、先づ教育其他に由りて内を治め、然る後進歩を致すなり。

征服したる外國に對しては、克く之れを己れのものとして合體せしめ、敢て嫌惡の念を抱かず、之れ希臘人に比し如何に羅馬人が世界を併するに適するものなるかを示す、斯くして善く統一するの事を以て目的と爲し忘るゝの事無し。道德の進歩亦之に伴ひ、個人は軍隊的生活の爲めに訓練せられ、家族的道德は無論希臘時代より優るものあり、姓氏の生せるが如き如何に之を重せしかを知るに足る。其智的方面に至りては稱す可きもの極めて尠く、徒らに希臘時代の創造を摸倣せるに止まるなり、羅馬の衰亡之を示して餘りあり、既に全世界を平げ、最早其身體を動かす

に餘地無くして、羅馬は遂に史乘に比なき道德的腐敗を爲し了りぬ、蓋し此時は既に其目的とする處のもの、何たるやを失はれたればなり。

斯く既に多神數の三要形態を検せしからは、以下之れが一神教に推移するの次第を觀んとす。

智的方面よりしては此次第もとより知るに難からず、畢竟希臘時代は既に衰運に向ひし多神教を承けて、當時極幼稚の度の實證的基礎に立ちて新哲學を組織せんとせしなり、其形而上學なるもの即ち之れにして、一神教への過渡的時期を構成するものなり、其推移の次第は先に運命の神の生ずるありて幾多の亂雜なる神々の作用に統一を附したりしが之に次では更に上帝なるもの生じ、總ての神の有する特質を悉く己の中に收め去りしものなり、然かも形而上學的神學者の唱へたる絶對的一神論は、極めて抽象的にして神人の間に連絡無く、社會的に道德的に何等の影響を及ぼす處無きものなり。

希臘當時の社會狀態は、其人民中に絶えず諸方面に於て鬭争を常とし、互に拒斥しある様なれば、其智的基礎なる哲學の動搖定まらざる故ありと謂ふ可し、羅馬に

至りては其國是一定し、終始之を貫かんと爲しあれば、斯かる事の無きは敢て恠むを須るざるなり。

此大革命の社會的狀態は、又希臘と羅馬の影響の結合せる結果なるを示す。此結合の事實、即ち精神的權力と世間的權力の二者の分裂せる所以にして、當時未だ道德的研究と政治的研究との間に區劃の明瞭なるものあらざりしかば、形而上學者は軍隊政治に慊焉たらずして、之に容喙を試む、之れやがて一の勢力となり、世間的のものに對して精神的勢力として存立せる處、且つや羅馬が漸次諸國を併呑し來るや、餘り大となり、邊陲の地、到底政治的に中央政府の下に従はしむる事難く、唯此宗教的方法に由りてのみ之を遂ぐるあるなり。且又在來敵視し蠻邦視したる諸國も漸く交通の度を高むるに従ひ、己れと同じ人類との事の觀念を強め來り、茲に一の普遍的道德の建設の必要を感じ來りしなり。

凡そ物あれば必らず則あり、羅馬の此二元的見地の結果のある處何處なるや、之を知るは興味ある事とす。殊に是れは一神教を奉せる羅馬領内の一屬邦たるを要す、猶太國即ち之れ、是れ他と分別して夙に一神教を奉じ敢て他に屈從せず、此國

に上の事が如何の關係に立ちしか、讀者之を知らむ。

第九章 一神教時代——神學的並に軍隊的組織の變態

羅馬が當時の文明諸國を統一するや、一神教の立ちて新に高等の社會的生活を經營す可きの時は來りぬ。此一神教にありては、多神教のものと異なり、一のものゝを以て之に屬するもの、全體の代表者と爲すを得可し、加特力教之れなり、是れ蓋し西歐統治の機能を全ふしたるもの、之を研究すれば乃ち足る。

一神教の政治的組織の主要なる特質は、精神的權力を起して世間的のものと對立せしめしにあり、請ふ此前者より初め、然る後後者に移らむ。此一神教に特有とする信仰箇條の一致せる事並に之に勵されて、諸々の全く全體する迄に至らざる國々をして統一せしむるに足りぬ、此萌芽は既に希臘時代に之を見しが、完全に遂行せられしは加特力教に於て初めて然り。

成程知識は人生行爲の上に主要なる影響を有し、又意見の一致なるものが、集合

と云はず政府と云はず、人類の集れるものは必要なるが、希臘哲學者の信せるが如くに、之を以て政治上に於ける勢力を過重するが如きは、之れやがて一場痴夢に過ぎざるなり。人類の智的生活が情的のものに比して、著しく其強度を尠くせるは既述の如し、故に理論的研究に先ち幾多の實際的の事は既に行はれしなり。吾人の近眼なる大哲學者の行動の如きも、其人の死したる後、全體系を通覽して、初めて其價を判するを得るに止まり、個々のものに就ては、正當の判斷を下す可くもあらず、彼の神學的時期に於て、僧侶が非常に推尊せられしが如きは、一見之れと反するの趣を呈すれども、實は此時にありても、知識にして實際的方面のものに用を爲すを得るものを爲したるよりして、初めて斯かりしなり。

個人と云はず、社會と云はず、實際の場合に於ては、天才よりも判斷力を要する方切なり、非常の時期に遭遇するに非ざるよりは、豈に天才の指導を待たんや。社會問題に關する哲學者の態度亦實際を離れて餘りに抽象的となるの弊あり、餘りて以て、實際に遠きの憾を免れざるなり。

中世に於ては、一大問題の解決す可きものあり、即ち希臘時代の哲學に於ける知

識至上主義の夢を斥け、然かも尙久しき間傳來せる思辨的活動の社會に於ける優先權の欲求を満足せしめんとす。中世に於て之れが解決として執りし處のものは、精神的主權と世間的主權とを全然分別したるにあり、先づ實驗的に行はれ然る後之れが學理生じたり。此精神的の方面即ち理論的の方は神學的のものなりしかば、其方にのみ主力を注ぎ、社會經營の事は其次に爲したるや明なり、とは云へ、加特力教が當時の社會進歩に貢獻する處ありしは事實なり、彼の之を評するもの、種々己れの見地とする處に係り僻見を免れず、實證的見地よりするものは、是等の偏狭のものを脱し、其價を認め得るなり。

此時に當りては、道徳力を抜きて全く獨立せしめて、政治力と對峙せしめ、而して之を政治組織に關涉する處あらしめぬ、此事は之れ近代文明の古代に比して勝れる處。而して此兩者は常に互に争ひて下らざりしが、畢竟其直轄範圍とする處同じからず、一は教育の上に、他は人生行爲の上に絶對權を有し、其以外のものは唯相談的に之を爲すあるのみ。

斯くして思辨的階級は茲に本來適當せる位置を得來りぬ、即ち之れが統治權を

全く掌握もせず、又全く之れより拒斥さるゝの事も無し、唯間接に、道徳的影響を以てして之に加ふるありしなり、之に由り蓋々たる日常生活中に起仆するもの、示すに「至善」の何たるやを明にせるが如き之れなり、之れよりして、社會の歸趣する處を豫め察するが如きの事生ず。

純乎として政治的方面より觀察すれば、此事は希臘哲學者のユートピアを實現したるのもの、門地無く、資産無く、將た又赫々たる武功も無くて、唯知識のみに由りて登龍門は開かれたるなり、之よりして社會の進歩の形式定まりぬ、唯時に應じて多少之を改變するあるのみ。世界的に之を見れば、此羅馬教制は政治的に結合せざる諸國を結ぶの事を爲しぬ、遠方の地にある諸國、到底政治的には一國の下に歸す可きにあらざりしなり、故に彼の此教を評するものは、單に其積極的方面のみを見ずして、又其消極的方面をも顧みざる可からず。

然らば之れが及ぼせしと云ふ道徳的の效果は如何。

是れ分れて二となる、靜的及び動的之れなり、前者は加特力教政本來の組織を述べ、後者は其歸趣する處を遂げしや如何に關す。先づ前者より初めに、此中世に

於ける組織の他のものに比して、一層優れるに驚かずむばあらざるなり、在來の門地武勳のみを事とせる中に立ちて知識を推尊し、如何なる卑賤の者も亦之に參するを得るに至る。一方には、門戸を開放して如何なる人も如何なる位にも至るを得可く、又法王の如きも多數の選舉に由らしむ、是れ最可なる制度なりとす。

當時の制度に僧院あり、之れ墮落腐敗せる社會より脱して、一向專念學問の研鑽に従事せんとするには、是非無からざる可からざりしもの、之れありて地方的の者を離れ、平等的見地よりして學問を攻究し、爲めに幾多の國々の間の連鎖を爲し、加特力教をして其勢力を張るを得せしめたり。

加特力教制度の政治的資質中有效なる主要のものは、僧侶の有効なる特殊的教育にあり、之に由り單に哲學上に最有益なる貢獻を爲さしめしのみならずして、實に歴史の攻究を爲せるものから、此教會の歴史は、社會的に見て人類の根本歴史を構成するものと稱するを得可し。

更に又此教の在來のものに比して差異のある點は、神託を除き用ゐざるにあり、在來のものは之を唱ふる事夥多なりしが、斯教にありては、其人を極めて制限し、誰

にても之を爲すとの事無からしむ、之れ往時に比して益々科學的傾向を呈せる時代にありて、もとより當然の事と爲す。

今又次の二者を述べざる可からず。(一)獨身制度(二)俗界の主權を併せて精神的主權の下に來らしめし事。

獨身制度は僧侶訓練上極めて重要な事、精神的に又社會的機能を遂ぐる上に有益なる効果を與へしは明なる事實なりとす、殊に加特力教にありては、信仰告白の爲めには此事必要なり、更に政治的に之を見れば、當時一般の社會制度は未だ父子相續を脱せず、故を以て、加特力教に於ても此獨身制を採らざれば、遂に其方に引き込まれしならむ。

教會の首長の俗界の主權を尋究するに當りて、忘る可からざるの事あり、即ち加特力の組織は、精神的權力と、俗界的權力と相衝突せるの時に起りしもの、若し教會の方にして至上權を握らすむば、逆に他の爲めに屈服せられたりしなり、斯からざらむが爲めには、いざと云ふ場合には、他を敵としても充分耐ふるに足る丈の實力無かる可からず、茲に於てか羅馬に根據を構へぬ。併し黨人の勢力強大な

る、其勢力最強の時を以てしても、尙之を抑壓するに堪へず、遂に伊太利の一小諸侯と下り了するに至る。

其動的方面に關しては特に述べ可きもの尠し。今教育の事に就き述べれば乃ち足る。

加特力教は、よしや今日其教育法に於て、益を加ふる處無しと雖、吾人は之を評價するに當りては、之れが過去に於ける全體を達觀して、然る後に之を行はざる可からず、多神教時代に於て、社會の大々部分は無學なりしを、此時よりしては人民生るるよりして宗教の事を教へられ、個人として又社會の一人としての行動に就き、執る可き處を指示したるは之れが大功と謂はざる可からず、僧侶の有する政治的勢力は、當時に於て教育の主宰が單に教授の事丈けに、其力を限られざりし自然の傾向よりして生じたる成果なり、此時の僧侶は東方宗教の知識に加ふるに、希臘哲學の深邃なるものを以てしたり。斯くして僧侶は知識の中樞を掌りしが、斯かる時代即ち未だ學問の分岐の明ならざりしものにありては、止むを得ざる處なりしなり。

其教理に關しては、斯教が社會進歩に資せんとの爲めに缺く能はざるものあり、當時の名僧知識に由り、組織せられたる中央教學府より一定の教理を出し、一般人民をして之に背く無からしめしは、統一上極めて妙なるものと謂はざる可からず。

中世時代に、此教義及び崇拜の事の極めて重要にして、之に由り其社會の運命を定むるに大なる價ありしとの事は、教會史を繙くもの、明にする處なる可し、即ち幾多の教理との論争の中にありて、之を定めんとせる當時苦心の様、之を知るに難からざるなり。

以下一轉して、之れが世間的方面如何を觀んとす、其中政治に關するものは既に述べしが故に、以下其道德的及び心的性格に就き考究せむとす。

中世の歴史を説くものは、兎角に獨逸民族侵入の事をもて偶然と爲し、其歴史を偶然的に解決し去らむとす、併し社會の事豈偶然なるものあらむや、羅馬は獨逸民族の侵入無くとも、封建制度を採るに至りしなり、其領域は有らむ限りの發展を極め、領域も其限りに迄及びぬ、トラージアン、アントニン等の時代には、當然之れが反

動の起る可き時にあり、抑も游牧時代は其國を襲はるゝも痛痒を感ずる尠し、蓋し進退極めて簡易なるものから、其國を奪はるゝも、容易に他に移り機を見て再び歸り來る可く、其去來の容易なる、鳥群の翔るに異らず。獨逸民族の南侵し來りしは、斯民族既に游牧時代の簡易なる生活を脱し、羅馬の侵入を重ねらるゝを以て、尠からず不平のものありしに由る、之れ既に農業期に至りしの證にして、此事以て社會進歩の結果なるを知る可きなり。

軍隊制度は中世を通じて存したりしが、此時は在來の攻勢的のものを改めて防禦的のものと爲しぬ、之れは特色とする處、之れ自然の數にして、羅馬の征討事業極度に迄達するや、其注意は今や一轉して、在來征服せし領土を保持せんとするにあり、頭には軍隊の長を戴き、之れは或一定の領土内を統治せん事を期す、而して其下には又夫々幾多の臣下あり、斯くして諸處に割據生じ封建制度起る、之れ獨逸民族の侵入無くも、當然ある可きものたりしなり。之れに因みて、奴隸は外國征伐の止むと共に、其輸入を杜絶し來りしが、其代りに、之れが子孫を擧げて、使役するに至る、之れを農僕サハフと云ふ。

封建制度の特質を論ずるに先ち、精神的諸制度が之れの過渡時期に亘りて爲したる功績を見んとす。加特力教の僧侶は其見解の極めて廣きものから、北獨逸民族の南侵を豫定し、之れに宗教を授けて、其猛烈なる勢を弱めしにあり。抑も斯教が封建制度の上に影響を及ぼし、之をして變態あらしむるは明なる事、先づ總ての基督教國を合して、一の教會の下に置かん事を期し、攻勢的の戦を止めて、防衛的のものたらしむ、邪教徒に向ひ大擧して爲したる戦争の如きは、實に之れが適例なり、其態度攻勢的の如きも、實は防衛的の性質を有するもの、斯くして又諸國を團結せしめ、以て幾多の獨立せる小邦の分裂するを防ぎぬ。又奴隸制度を止めて、農奴を以て之に代ふるに至る、之れ加特力教の特有なる主従の關係に在りて、其間に有する精神的主權なるものありて、互に之を敬せる處よりして生ずるもの、米國に於て、加特力教の行はるゝ、地方の奴隸の方、新教の方面のものに比し優等なるは之れが爲めなり。

中世に於ける以上の諸特色は、綜合して騎士制度となる、之れ實に中世紀の精華にして、由りて以て社會の秩序を保持するに效ありぬ。

茲に吾人は封建制度が近代社會の搖籃たるを知る、之に由り歐洲全社會を擧げて、軍隊的時期よりして、工業的時期に至らしむ、當時は軍隊組織は唯外敵侵入の防禦を主とせしが、北東の蠻民襲來しても撃退せられ各其土に歸り農耕を事と爲すに至る、而して、加特力教に改宗して道德的方面は堅固となりぬ。

以上一神教の政治的方面なりしが、以下之れが道德的方面を見んとす。加特力教の終極に期する處は普遍的道德の建設にあるが故に、此事はむしろ加特力教の組織を論じたる終に述べ可く、其政治的方面の叙述の後に爲す可きにあらざるが如し。併し更に之を考ふるに、此一般的道德は加特力教に由り社會的地位の至高のものを得しとは云へ、之れが萌芽を起したるは封建制度の結果のみ、其れを加特力教が擴張せるに外ならず、然らば、此二者はもとより不可離の關係に立ちあり、故に此に之を述べ、其順を失へるの事無し。

形而上學派の陷る大なる誤謬は、加特力教の爲せる道德的效力は唯其教義の上よりのみ觀んとするにあり、之れ實に誤れり、當時の社會組織と別にしては之れ效果なきなり、彼の東羅馬帝國の教若しくはモハメット教の如き、教義の之に劣らざる

に係らず、效果の見る可きもの無き所以は、職として此點に於て缺如する處あるに外ならず。加特力教も其が社會的價值を定むるなる、組織的の一大宗教力として之に臨むのものたらざりしならば、遂に斷片的の無勢力のものとなり了せむ。此爲したる社會的運動如何を見るに先ち、其道德的見解の何たるやを見む。

是に關しての最重要なる問題は、中世に於ける加特力教の道德的勢力は、其教義が或る人民一般の意見とする處のもの、機關たるが爲めか、將た又之れとは別にして、人々が其未來の生命に對しての希望、否むしろ畏怖よりして生ずる處のものかと云ふに、余は其前者たるを斷言するに憚らざるなり、之れを證せんには兩者の衝突する場合を見れば最明かなり、例へば武士が決闘するが如き、宗教上よりは禁せらるゝに係らず、之を敢行するあり、未來の賞罰よりは現今の其の方、人心を制縛するの愈々大なるを見る。

斯教の爲したる道德的改新は、道德を以て社會上最上至極のものとして爲したるにあり、之れ個々の私人的のものを捨て、人類が社會的生活の總てを通じて、其在なる根本的條件を稽查するにあり、斯くして人類の精神的權力を以て獨立の職務を

掌らしめ、以て普遍的教義を示さしめ、彼の俗界的權力と對立せしむ、もとより神學的哲學の茫漠なるものと關聯せる等の事よりして缺點を生せしと雖、其あるは無きに勝る萬々なりとす。

斯くして、道德は社會的に最必要のものとなり、人性の其他の諸々の機能は唯之れが爲めの手段と爲しぬ、此事人の社會的行爲に於て最必要の事、之れ無くば、哲學者は唯其智的攻究の結果に由り事を定めむとし、科學者は唯表面的觀察に止まり、美術家は其製作する處のもの主義の見る可き無からんなり。

加特力教の道德的評價に關し忘る可からざるは、之に由り道德と政治とを全然分別したるものから、道德的方面の教義は唯幾多の標型を示し、人の行爲をして之に近かん事を期せしむるにあり、之れ他の美術等に爲す處ものと同じくして、よしや人は其に全く一致する能はざるも、尙人をして其歸依する處を知らしむるに於て、大功ありと謂はざる可からず。

斯教に由り道德の方面として進歩せざるのもの無しと雖、今以下は重に三點に就き論せんとす、曰く個人的方面、曰く家族的方面、曰く社會的方面是れなり。

個人的道德、大目的は、理性を高めて感情を制縛せんとするにあるなるが、加特力教は、個人的道德を以て其人の他の諸々の行爲の基礎と爲しぬ、即ち攝生の事は當時の社會に必要なりしなる可く、又謙抑を説き自殺を戒めしが如き、又斯教の貢獻したる處のものと爲す。

家族的道德、精神的の秩序と政治的の秩序と分別されし以來前者の必要なる事を愈々感じ來りぬ、蓋し前者に由りて初めて家族的道德を定むるを得可く、而して當時の政治に關與するを得るものは極めて少數の自由人民たりしなり、加特力此缺點を補ふて餘りありき、父が家族に對する關係は在來君主の臣僕に於けるが如くにして、殆んど生殺の權をも掌握したりしを、之を改めしが如き、又婦人の權力を明にし其社會的地位を進めしが如き、其功に歸せざる可からざるなり。

狹義の社會的道德に關し、加特力教の之に及ぼしたる貢獻は、在來の極野蠻的の愛國心を擴めて、世界的のものとして爲し、仁愛、人道等の名目を稱へし事之れなり。勿論其初期にありては、宗教上の關係よりして、其交通する處基督教の諸國に限りしかば、之れが行はれし範圍も亦然りしなり、歐人の眼光よりしては此見解もとより

惟むに足らず)今日に至りては之れ更に擴大して五洲同族の感あるに至る。

加特力教の下に於ける知識の状態如何は、次の四目の下に之を論せむ。(一)哲學、

(二)科學、(三)美術、(四)工業之れなり。

哲學、加特力教の之に對する傾向如何と云ふに、其誤解されし丈それ丈顯著なるものなるが、確かに人類一般の上に加へたる効果は没す可からざるものあり、人々をして營々として物質的生活に陥りし中より救ひしは之れなり、哲學に關する深き攻究を爲すを得しは之れなり、多神教にありては、哲學を敵視したりき、此時に當りて、智的たると社會的たるとに論無く、精神的權力と俗界的權力との別を生じぬ、斯くして社會學を其實際的のものより分ちぬ、故に社會學の濫觴は中世の暗黒時代にありしと謂ふを得む。

科學、一神教は、自然法の不變なる事と並立せず、蓋し前者は自然現象を以て全然神の任意に出づるものと爲せばなり、併し中世のものにありては、此期を脱し其前の多神教の爲したる阻礙を除去するに效ありし、例へば多神教の時にありて、宇宙現象の細密のものに至る迄、神學的に説明したりし時にありては、科學的に爲す

は極大體の事に止まりぬ、然るに一神教となるに及びてや、此度は神學的に説明するものは、極其範圍を制限し、或ものに集注され、一般の事物は科學的自由討究を許しぬ、宗教的に考察すれば、多神教は拜物教に劣り、一神教は多神教よりも劣りしものと謂はざる可からず、而して其衰ふるに應じて科學は益々勢力を加へ來る。

美術、之はもとより次期に至りて大發展を爲したるものなれども、さりとて此時期を全く度外視す可きにあらざるなり、音樂、建築に於て爲したる處大なり、調音を起して唱歌を改良し、オルガンの創造の如き、又建築にありては、大なる宗教的殿堂の如き、此時に生じたるなり、多神教の時にありては、多く郊外に於て祭祀を行ひしかば、此方面の進歩を見ず。若し夫れ詩歌に關しては、ダンテの名を擧ぐれば事足りなむ。

工業、之れは次期迄延さざる可からず、唯此處に云ふ可きは、天然力の應用益々多大となり、例へば風車、水車の發明の如きもの皆此時にありとす。器械の使用を妨害したるは、奴隸制度の存在にあり、之れあれば、人力充分ありて、別に天然力の應用等を顧慮せずとも、些少の不便を感せざればなり。斯く赫々たる時代を目して、

暗黒時代の名稱の下に葬らむとするは非なりと謂ふ可し、とは云へ之れ畢竟過渡の時代に過ぎずして、神學的、軍隊的のもの崩解して新組織を迎へんとするに外ならず。

中世に特有の組織を見るにつけ、其一時的の性質なる事は、其が初め獎勵したる發展なるものは、やがて其衰滅の第一原因なる事に由りて知らる可し、精神的宗教に於て、神を一體に歸するは最後の變形なり、之れ以上に至るを得ず、然るに當時に生せる實證的精神は、此事をも舉げて破壊し了りぬ、初め加特力教保護の下に生長しながら後には之を超えぬ。

之れを衰滅さするの原理を尋ねれば、遠く體系自身より以來にあり、即ち自然哲學と道德哲學との大區分に濫觴すればなり、之れ希臘人に唱へられしが、後に進歩のありし理由なり、蓋し自然哲學は其性質單純なるものから、他の道義哲學を顧みずして、單獨に顯著なる進歩を爲し得しなり。

夫れ形而上學的精神は、拜物教を多神教と爲し、又近くは多神教を一神教と改めしものなり、其が最強の時其變形力に缺くの理なし、夫れ加特力教は智的進歩を助

けしが、其本職を完ふして最早進む能はず、而して他の知識は進み去りしに當りては、彼は遂に無用の長物となり了せんのみ、其固定的、否むしる退歩的性質を改めて、進歩的のものと爲さざる可からざるなり、或は加特力教は其道德に於て勝れりと爲すあるも、此事は知識と別にしては獨存する能はざるもの、後者の進歩せざる限り前者の勝る事能はざるなり。

中世紀の俗世界の衰退は極顯著なる事、封建制度の三相に於て其一時的のものなる明に見らる、(一)防衛的性質、即ち侵入する蠻族農民となり其土に安じ、更に侵し來るの憂無きに至りて廢弛す、(二)諸々の小諸侯に分れし事、之れ即ち過渡的にして更に一大集中を期せり、(三)奴隸廢止。以上三件に由り、封建制度は其職能を忠實に盡せば盡す程、衰滅に近づくを見る。

以上を回想して、人をして自然に想ひ浮ばしむるは、一神教に在りては、其政治組織の苦心に久しき幾月を費したる、其が實際に社會を統御せる時期の短きに比し、霄壤の差あり、其生起には二百年を費したるに、歐洲の主權を掌りしは、僅にグレゴリオ七世とボンファラス二世の二代のみ、其れ以後の五世紀間は活動を絶えず滅殺

し、唯苦痛に陥りしのみ、加特力教をして此くの如くに至らしめしは其組織にあらずして其教義の罪なり、之れは一時的性質を有する神學的哲學に執着して損はれしものなり、今之を改めて更に廣大なる智的基礎に由らむか、優に近代社會の精神的新組織を監理するに足るなり。

第十章 形而上學的狀態並に近代社會の批評的時期

神學的哲學と軍隊政治は古代に勢力を占め、中世に在りては之れが變形され且つ其勢力を弱められしを見たりき、以下近代に於て最近の不變的社會を建設するに至る迄の過渡的時期に於ける之れが崩解を見んとす。本章にては舊組織の廢弛せる如何を見、次章に於て、實證的組織に由り其爲す進歩的開展を見ん、固より此二者は事實に於て別々のものにあらず、其一のもの、生ずるは必らず他のもの、存在を意味するなり、然りと雖、今は抽象的にしばらく、兩者を分別して順次論せんとす。

此くの如き過渡的時期は、舊者と新者とを結合する上に於て極めて必要なる事にして、然らずして彼より之れに飛躍せんとする事は、其社會の秩序を亂す可し、社會の進歩亦漸を趁ふて爲さざる可からざるのものなり。其爲す處、もとより消極的なりと雖、亦缺く可からざるのものなりと爲す。

此崩解は通常第十六世紀と爲すも、余は更に溯りて第十四世紀の初と爲さむとす、蓋し加特力教は其職責を第十三世紀の終期に近く遂げたりしが、之れと同時に其政治的存立の事極危くなり初めければなり。精神的方面にありては、ポニファス八世の時に絶對的統治を試みしが、もとより反抗を受けしと同時に其衰頹の兆を示せり、俗界的方面を見れば、之れと同時に封建制度は最早其職責を盡したるものから廢滅に至れり、其爲したる防禦政策二様あり、(一)其文明を北方蠻族に蹂躪するを防ぎ、(二)又回々教徒の侵入を止む、前者は彼等を加特力教に改宗せしめて、之を成功したるが、後者は均しく一神教なりし故、之を行ふ可くもあらず、十字軍の爲したる功績の重なるもの、一は確かに其が文明を保持したるにあり、其防衛的運動も第十三世紀に漸く完成したりしが、斯くして其用無きに至るや、やがて頹廢を初

めしなり。

第十四世紀よりして十九世紀に亘る批評的時期は、之を二大部分と爲すを得可し、前者は、第十四世紀より第十五世紀に亘り批評的運動の自發的にして、少しも組織的教義の加ふる無かりしもの之れなり、後者は、消極的教義の漸く勢力を加ふると共に遂に壞滅に至りし迄を包含す。實に批評的教義は、亡滅しつゝありし組織の止みし結果として生せるもの、其原因にはあらざるなり、加特力教が一時的性質を有するものなる事は外敵の攻撃無くとも、内的に争闘を事として自滅に至りしに由りて之を知らる。

精神的權力と俗界的權力との分別せる事は、やがて、其衰亡の原因のみ、蓋し之に由り現在文明と一致を缺くと又現在の唯一の哲學の不完全なるとに由る。軍隊精神は、防衛的の意義を帯び來りし時に當りても、依然獨占的統治を圖りぬ、由りて主權の分擔は、もとより望む處なるが、之れ工業的精神が軍隊的のものに代りたる時、初めて完全に遂げらるゝもの、之に先ちて之を行はむとは早きに失したるものと謂はざる可からず、神學的精神は往々にして其領域を超越するあり、蓋し僧侶の

權限は全然經驗的に定むるのもの、先天的に際限のある可きにあらざるなり、加特力教が政權を失し來りし時に於ては、法王權に附屬して、或領土を有せしむるの事必要なりと雖、法王が俗權を有するの事は、其が野心をして愈々盛んならしむるものありき、二者の分別を唱へしは之れ此時代の名譽とす可きを、一方に文明の不充分なりしと、又一方には、哲學の善からざりしとに由りて、之を遂ぐる能はざりしぞ憾みなる、又各自內的に之を考察するに精神的のものも、俗界のものも、中央權と地方權との間に權限の間の衝突ありて、遂に其調和の完きものは之を見る能はざるを見る。

更に轉じて第二期、即ち舊組織の壞滅が組織的消極的教義の主宰の下に行はれし時を觀察せんか、將に來らむとする組織の萌芽を庇護し且つは不斷の無用の闘争を避けむとには斯かる教理の存立を必要とするを忘る可からず、斯かる消極的教義存立の必要容易に之を知るを得可し、例へば期熟すれば一神教よりしては新教當然出でざる可からざるなり、多神教にありては、天地間の現象を悉く親切に説明し盡し、餘す無しと雖、一神教に在りては、之に反し其説く處は唯根本的のものに

止まり、枝葉に亘れる事共は擧げて各自の自由討究に任せるものから、其等に關し
争論のある、固より其處なりとす、嘗に精神的の事に關して之を爲すのみにあらず
して、又社會問題をも之を爲すに至る、之れやがて、新教の特色にして其成立の氣運
を促がしたるものなりとす。

此一時的哲學の性質は其職能より自然定まる處のものなり。今日プロテスタ
ントなる名稱は、ルーテルのものに限り云ふが如きも、之を更に擴大し之れより以
後の諸々のもの、無神教、自然神教の如きをも包含し、換言すれば社會の舊組織に反
せんとするもの、總稱と謂ふて可なり、此消極的精神に伴ふ害は恐る可きもの
ありと雖、之れ無くむば、大なる改新は期す可からず、在來小なる事は順次之を改め
來りしも、今や全改變を要するに至りしなり、新者の出づるに先ち、批評的態度を取
りて以て舊者を破壊し去るを以て必要とす。

更に他の區分の説く可きあり、即ち第三世紀の終期を二個の殆んど同一の部分
に分つ之れなり、其一は新教の主要なる形式を構成するものにして自由討究の
權力即ち之れ、之に由り基督教の名目を以てして、加特力教を破り、遂には基督教自

身存立に缺く可からざるものをも擧げて没し去らむとす。第二のものは、自由神
教と稱するものにして、第十八世紀の哲學なるもの、之にては自由討究の權利は無
限に擴大せられしものと公言せられしが、其は一神教の中に於て然かす可きもの
とし、一神教たる事は動かす可からずとせり、併し之れ又遂に倒れぬ、兎に角此破壊
的作用に由り智的方面のみ統一なる事は明に滅殺せられしぬ、併し斯く單に豫
定的作用のもの、上に基礎を樹立して、以て政治の改設を行はんとす、其結果唯暗
黒のみ、社會主義の生起するありて初めて其推移を完ふするを得しなり。

吾人が上來抽象的に研究したる運動の機關を見るに、精神的權力と俗界的權力
の二者の分別は、よしや折々は、近世文明の重なる方面の下には再現するありと雖、
之を爲すは難き事と爲す、中によりて、一の特に明なる別のあるあり、即ち哲學者と
法律家との對峙にして、當時の如き混亂せる社會にありては、二者を以て精神的方
面と俗界的方面との對立と解するを得む、之れ一神教組織の盛なりし時に殊に伊
太利に之を見る、夫々其機關を大學と議會とに有しぬ。

精神的要素を見て形而上學的精神が自然當時の社會的勢力を占めざる可から

ざるは明に之を知る、希臘以來哲學分れて二となる自然哲學及び道義哲學之れなり、前者の代表者は、プラトーンにして、流れて神學哲學となり、後者は、アリストテレス之を代表し實證哲學に傾き、人類の悟性を神學的擁護より脱化せん事を計りぬ、一は唯多神教の方面の批評には陥りしもの、自ら一神教たるを失はず、他は之に反して、先づ外界の稽查を事としたりしかば、批評的態度を執りて又組織力に缺く處ありぬ、此後者の方面よりして大革命の導火線を得たりぬ、此哲學先づ自然界より初めて後、道德界、社會上にも解釋を試み、合理的に之を爲さむとす。

轉じて法律家を見るに、丁度スコラ哲學者が精神的方面を代表せるに相當して之れは俗世界を代表す、教會の法律の研究よりして、遂に法律一般の研究の必要を感じ來り、次で法律の教授は大學の特權となりぬ、併し此法律と哲學とは根源を同一にするにあらずして、寧ろ封建制の生産物と稱す可きなり、之れが加特力教に對立して勢力を占め來りしは、教會の權力と俗界のとの間に衝突の生じ來るに於て益々著しく見ゆ、殊に十字軍に際し、君主皆出征するに及びてや、留守に於て獨り權力を恣に爲しぬ。併し是等のものは皆一時的性質のもの、蓋し此スコラ哲學のさ

すがは神學的組織にして、法律家の最後に頼む處は軍隊組織にあり、然るに是等のものは皆社會の進歩と共に當然倒れ去らざる可からざればなり。

近代社會革命運動の性質、經路、其機關を論じたれば、以下其完成の如何を見るのみ。

精神的方面の壊滅の自發的時期は先づ注意す可きもの、萬事之れよりして生ずればなり、之れ曾に第一に遂げらる可きものたるのみならず、最困難のものたり、之に由り全組織の崩解を意味するなり、帝王が法王の歐洲の權力に抗するはフィリップ、ルベールに初まる、實に第十四世紀なりとす、次で法王のアヴニオン遷座するの舉あり、其れより種々の事生じ來る、諸帝王は其結果の如何のもの、あるやを知らずして、唯法王の權力を滅するに力めしなり、又諸々の僧侶も唯中央主權より脱化せんとの事をのみ之れ計りしが、其結果としては、遂に軍隊の下に跪かざるを得ざるに至る、抑も精神的權力は之と獨立にありて初めて之を遂行するを得可し、然るに今や之れ亡し、其結果のある處知る可きのみ、而して一方には在來全歐洲に勢力を有したりし法王は、僅かに伊太利國內の一選舉侯となり了りぬ、斯くして社會組

織は解弛し初めぬ、此時に出でしは新教なり、新教は實に彼が原因にあらずして、彼は實に之を促したるのみ。斯く壞滅に至るは止むを得ざる事ながら、遂には歐洲政治の上に大虚隙を生ずるに至りぬ、即ち其重なる國々の間の戦となり、わけては英佛兩國間の確執の如き、法王の權力も之を止むる能はず、其空名を止めたるを證して餘りあり。

俗世界組織の廢弛は、第十三世紀を通じての現象なりしが、加特力教組織の損はれざる限り、其效果を示す能はざりし、併し之れあるや否や、帝王と貴族との間の權力の均衡破れ、封建制度の滅亡を促がすに至る、第十五世紀の終に近き頃には、貴族の地方的勢力が帝王の中央權力を凌ぎぬ、之れ産業的精神の勃興して軍隊的蠻風に慊らざるよりして生じたる結果なり、斯く軍隊的束縛より脱せんとして、主要なる軍隊の主が戦を起したりしが、遂には之に伴ひ、己れ本來の目的を失ふに至る、蓋し斯くして軍隊的精神存立す可くもあらずして、己れも併せて滅せざればなり。常備軍の設立は、武士なる特殊の階級を滅しぬ、之に由り封建制度を破りぬ、産業的精神は之に由り多大の利益を得しが、武士は其特權を全く奪はれぬ、而して貴族は

之に由り損を蒙り、帝王は益する事多く、蓋し兵力集中すればなり。

此くの如きを以て、宗教革新は實に其れ迄二百年に亘りて存したりし社會状態に、最後の捺印を加へしに過ぎざるなり、且つ又此運動は新教と稱するものに止まらずして、加特力教諸國にも、固より之れありしなり、彼の顯理八世が羅馬の主權を脱するに當りてや、事實に於ては、シャル五世も又フランス一世も亦彼と同様なりしなり、總ての宗派に通じて二點の共同なるものあり、一は法王權の一人に集中せるを打破し國々の精神的權力を夫々の俗世界の支配權の下に置くの事之れなり、此變化の真相を察するに、人情は僧侶たると俗人たるとを問はず同一の事を以て之れを行ふ處を彼に禁するが如き事を止む、即ち獨身主義とか懺悔の廢止の如き之れなり、此くの如きを以て此運動は羅馬より遠方の地方に於て先づ行はれぬ。加特力教の分裂は、當初より主として、ジユースト會の設立に由りて、試みられたりき、之れ實は、諸方より加特力教に對し壓迫し來りし勢力に對し、其抗拒の中央機關たらむとして出來しものなり、法王は主として俗世界の權力に汲々として盡瘁し精神界の事を顧慮するに遑あらず、此方面を引受けて立ちしもの即ち此ジユースト

ト教徒なりき、此助に由り加特力教は晩年の三百年の生命を保持するを得しなり、其主張する處は僧權は俗人の以上でありとし、知識ある少數のものは自由の特權を有し、大多數は之れ無しとす、然かも、其教を擴むるに及びてや、此特權を有するもの益々其數を加へ來る、由りて遂には同一人が欺罔者にして又被欺罔者たるが如き神祕的のものとなるに至る、又教育の必要を説き知識、わけては科學的を尊び、信仰を之に従屬せしめんとす、然かも、彼は知識の獎勵を以て、信仰の開展の手段とせむとするが如き、前後矛盾の事に出づるあり、其有名なる外國傳道の如きも、亦之れと同一轍を踏みしなり。

兎にも角にも、此ジユースト教派は、宗教自由の論調を以て外より來りし侵寇に對しての唯一の障屏たりしなり、然かも滔々たる加特力教の衰運は之を防遏す可くもあらず、之を改革せんとして、曩にフランシスカン又はドミニカンの教法ありしも成らず、其進むに及びてや、廢弛益々甚しく、或は智的方面に若しくは、道德的方面よりして新勢力に抗拒せんとせしも、適々其無能なるを表白せるに過ぎざりき、フィリポ二世よりポナバルト朝に至るまで此無益の勞作は繰返して行はれたりき、晚

年斯界の豪俊の士出で、之れが救治を試みしと雖、其は遂に加特力教の特徴を主張したるにはあらず、他のものにも通じての事を云ひしに過ぎざるなり。とは云へ、僞善とか若しくは進歩に敵對すとの事を加特力教のみの性質とす可きにあらず、新教も亦之を有す、彼にありては、教理を俗世界の權力に屈服せしめし代り、之にありては之を或主義の下に従はしめ、同一の結果を生じぬ、例へば、英國の正教は下等人民には、共存組織の政治上必要なを説きて、又上院議員が信仰を擅に改變するを其特權として唱導せるものから、彼等の中には其に對し深き信念を得る能はず。

最後に加特力教の拒拒は過去三百年間に亘りて社會進歩に貢獻したる處もあり、即ち社會の秩序を保持したる外に之れが新教に抗せるよりして、加へたる社會的利益を忘る可からず、新教にありては、唯人類理性の尊む可き事をのみ唱へて、其未だ不完全、不充分なるものなるをも顧みずして、之を縦横に運用せむと試む、其弊の赴く處知る可きのみ、之を止めしは實に此加特力教の功績に歸せざる可からず。過去三世紀間の俗世界の變遷に加へたる批評的精神の效果は、其主權者が帝王

たりしか、貴族たりしかに應じて、夫々の周圍の社會的權力に加はるを見る、是等のものは第十七世紀の後半迄は全く其特色を發揮せられざりし、蓋し尙宗教勢力の盛なりし爲めのみ、次で之れが衰ふるに伴ひて彼起り、之れが加へし腐敗を清掃しぬ。今帝王權と貴族權との二者を比するに、前者は英國之を代表し、後者は佛國に由り代表されあるが、共に封建制度を打破するに功ありしが、其得失のある處を察するに、佛國は王權盛にして、貴族無くも苦痛を感ぜざる事、英國の貴族が帝王無くして苦を感ずる以上であり、従ひて前者は其基礎固く、後者は危し、英國寡頭政治が帝王廢立の權ありと主張するも畢竟之れ空文のみ、未だ一度も實行せられたる事無し、之を佛國の帝王が其貴族を存廢するの實權を有せしと孰れぞや、斯くして新教は何處にありても、殊に英國に於て、階級制度を動かさず、之に反して加特力教の佛國の如き之を爲すあり、例へば前者は婦人にして帝位に立ち、甚しきは貴族の家を襲ぐありと雖、後者は之を許さざるが如し。

新教は、俗世界の執權に關し、上記の二場合に於て崩解を阻むの事を爲したり、英國にありては、新教の設けし國民的法王ありて之を遂ぐ、之れ精神的主權にして、未

だ以て眞摯なる證認を得るに至らざりしも、一時多數の人民に對し、眞正の法王を失ひし代りを爲し、延いて度を過して大なる政治的動亂を生せしめぬ、佛國には丁度之れと正反對の現象生じぬ、即ち貴族はプレスビター、又はカルヴァン派を擁して、王權の昂進に抗したり。

帝王が遂に軍隊の長たるに止まり、部下にある幾多の省局が大なるに失して、己れ一人の左右する能はざるに至るや、大臣的職能なるもの生じぬ、之れ實に新政權なりとす、實權を掌握したりしは、彼の破格のフリードリヒ大王を別にしては、ルイ第十四世を以て歐洲に於ける最後の帝王なりとす、リシエリュが彼の如く赫々たる勳業を得しは、嘗に彼れの賦能にのみ由るにあらず、實に當時の風潮之をして然らしめしなり、此時の一現象は、在來至上權を握りし軍隊の勢力を大臣の下に隸屬せしめしにあり。

軍隊政治の壞滅は、嘗に常備軍を組織して、封建時代の民兵に代りし事にて表はるのみならず、王が軍を統ぶる事より退くに當り之を指揮せしは、實に戰を事とせざる大臣たりしなればなり。之れ實に近代が軍隊的時期にあらず、之れあるは唯

例外の場合たるに過ぎざるを證して餘りあり。

軍隊組織の壊滅と關係ある變化を遂ぐるに大なる功績を爲したるものは、彼の少數の階級即ち外交家なりとす、之れは在來法王の權能が掌りし國際間の政治的關係を行はざる可からざるの必要よりして生じたるもの、其初は加特力教の僧侶主として之に當りたり、此階級は大臣權力に隨伴して軍隊力を殺ぎぬ、外國と合盟を締結するが如き、之が掌りし處より奪ひて己に移したりしなり。

以上の諸現象は、實に新教本來の政治的方面に及びしものなるが、此自由的精神は宇宙の全般に彌蔓し、智的に社會的に舊組織の受く可き打撃を與へたり、素より新教は嚴格には、批評的教義に一致せざるにせよ、新教は其性質兩者の中間にありて、舊組織より之に至るには缺く可からざるのものなり。批評的精神は一言に約攝すれば、個人の自由討究の精神之なり、即ち各個人は己がせし如何の研究をも爲すを得るの事之なり。此精神は初めは過去二百年間に亘りて準備されし社會變遷の結果に過ぎざりし、之れ舊教訓と新精神的羈絆との間の政府の状態の是認に過ぎずして、消極的性質を有するもの、唯一般的事實を抽象的に云ひしなり、之れ

即ち在來の束縛より脱するを得との事、彼のルテルの出づる前、既に此傾向は陰々として存したりしもの、彼の成功は唯其氣運の熟したりしが故のみ、之を當時の俗世界の事情に比するに、其必要なる明なるものあり、當時の俗界の權力のみを以てしては、全然壓制に陥りしを免れず、然るに一方に新教の起るありて、各自に自由討究の精神を鼓吹し、以て之れより脱化するを得せしめしなり、よしや消極的性質を有したりしにせよ、之れよりして人々産業的に、科學的に將た又美學的に各自の精力を發揮するを得せしめしものは之れなり。此新教の起るありて、近代の政府は精神的の社會運動は彼に委し去り、物質界の秩序を定むるをのみ其事と爲しぬ、然かも一方精神的方面の發達と並行するの頗る困難なるを感じぬ、唯此革新的教理は、其一時的たる可きものを以て、久しきに亘らしめんとせし處、其欠陥と謂はざる可からざるなり。

而して又一方には、新教ならざりし諸國に於ける運動の結果を觀察するを忘る可からず。彼のヤンセイ教の如き、加特力教僧侶中に起りしものにして、之に對抗したる勢力の盛なる事、新教に劣らざるものあり。次に寂靜主義に就き少しく説

かんに、人智の初期に於て、神學的哲學勢力を占めしが、之れに基きたる道德は、利己主義の結果を生じぬ、斯く個人の救済を主眼とするの事は、此くの如き時代には止むを得ざるの事なり、寂靜主義は此神學教理一般に對し、吾人の道德構成を主張せんとせるもの、由りて以て神學教義の不完全なるを自然表示したるものなり。

批評的教理が其一時的状态に於ける道德的特質を検せむとす、加特力教にありては社會道德を無視し、唯下層人民をのみ束縛し、上級のものは其欲するが儘たらしめしが、彼にありては之に反して人民一般の主權は、一般の利害休戚に就き至高の重要を認め、平等の教理は人類一般の威嚴を加へ、又國民的獨立の教義は加特力教破壊の後に於ける諸小國をして、克く其獨立を保持するを得せしめき、是等の事皆近代に於ける加特力教に對しての異端に由り遂げられし處のものなり、基督教の初期に於ても、是等の異端なるもの無きに非ずと雖、彼に於てのみ成功し之にては然かせざりし所以のものは、之に於ては、全く氣運の至らざるものあればなり。

加特力教に對して起りし新教にも種々のものありて、各其特色を有せり、之れに屬するものを、ルテル、カルヴァン、ソシヌスの三者と爲す其特色とする處を見んに、ル

テルのは其教義に於ける改新は、未だ以て甚しきに至らず、其然かく深く加特力教と分れざる斯かる事は、新教が國教となるには、最適當たりしものなりとす。次でカルヴァンの起るあり、其教義の改新はルテルのものより更に些少なり、ルテルの加ふるに加特力教の特色にして以て社會統一を保持したる體統を生じ來りぬ。ソシヌスに至りては、實に加特力教の膝下に、崛起して在來新教すらも、敢て試みざりし改革を之に行はんとはしたりき。最後にクローカーに就き一言せんに、舊組織に對抗し、軍隊政治を罵る之れより甚しきものは無し、もとより他の新教も己が主義の爲めの外は、戰を好まざれども、之を高く標榜するの事、此くの如きものあらざるなり。

抑も新教の運動は、唯徒らに政治的方面の事を爲すとの事のみにあらずして、克く其改良せる教義の下に舊組織を破壊するを力めたりしが故に、之に次第のありしは疑ふを須むざるなり。新教の爲したる精神的運動は、歴史上之れと關聯せる革命の結果にして、其原因にはあらざるなり、而して政治的運動なるものは、之に先ちて充分にして組織的なる批評的準備無からざる可からざるなり、之れ無くして

は未だ以て其革命を完ふする能はず、今此處には唯新教の革命にして其地方的一時的意義を離れて、人類の大運動を生せしめし處のもの、唯之れが氣運を導きしに止まるものを見んとす。第一に和蘭が西班牙より獨立せる事、之れ批評的教義の結果にして、人民の主權を尊むものから、小國を以てして克く大國に抗したりしなり。是れよりも更に一般的性質を帯び、更に敢行的に社會改新を爲したるものは、大英國革命之れなり、主として新教の誇りとする有名なる政治家の下に爲されし民主的にして長老教會的の革命にして、平等主義が此争闘に於て大に苦心せられたるものとす。米國獨立戦争に至りては、又是等と同様純乎として新教的のもの、之れ以上の事は無し、即ち和蘭的の革命を以て、初め收め得し處のものは英國の求めんとして得ざりし處のものなり。其成功如何に關しては容易に言ふを得ざるものあり、蓋し批評的教理の有する不便を極端迄進めしもの之れなればなり、他國に優りて哲學者及び法律家を尊重するあり、而して其人民の收むる租税は加特力教宣教師の資産に優り、然かも眞に社會的目的ある無きなり、米國未だ以て理想的のものと爲す可きにはあらざるなり。

扱是れに本來固有なる欠陥を見んに、其最古くして、又最大なるものは、精神的權力が俗世界の權力を獨立して、政治的存在を爲すを得ざるの事なり、加特力教の時にありては、之れ明にありて、其爲したる功績の最大なるものと爲す、之にして實證的哲學に由り改造されたるには、社會の新組織之れあるを得可きなり、然るを之れを忘却し去る、過之れより大なる莫し、斯くして近代文明の根本原理とす可き兩者の別は之を無視せらるゝあり、社會進歩の大概念は、忘却し去られぬ、頼む處は唯此批評的時代に困厄を排して進み來りし新社會要素の成長にあるのみ。

第二の誤は、精神的と俗世界的の兩者の權力を一體に集中せんとする事なり、帝王はモハメット流を以て近代帝國の理想とし、僧侶殊に新教のものは、猶太又は埃及の神政の回復を理想とし、哲學者に至りては、希臘時代の哲學的神政即ち心的統治なるものを計りぬ、此最後のものは、最注意す可きの事、蓋し有力者の大多數は之に赴けばなり、今茲には唯此事を記し後章更に説くあらむとす。

新教の爲めに道德の危ふせられたる事は、敢て長く説くを要せず、之れ蓋し頗る明瞭なる事實なればなり、人が皆重大なる問題や又最利害の多き問題に自由に討

議するを得るとの事は、其人々をして遂に恣の行に出で、其道德を壊滅せしむるに至らざりしこそ不思議なれ、其然りしは、もとより當然の事のみ、然かも其壊滅の事無くして人の道德性が幾多の顯著なる事件に不變たりし事は、人性の端正にして全然之をして壊亂せしむる能はざると又一には近代は生活の上に勞力を加ふる嚴にして羅馬、希臘の人民の陥りしが如き、放肆を爲すを得せしめざりしにあり、在來新教は加特力教の定めし家族的道德並に社會道德を破りし事を以て責められざる可からず。ルテルの改革は、一に加特力教の僧侶が獨身主義に堪へざりしと、一には貴族貪欲にして、近傍の寺領を併せんとの野心の二者に由りて、大に助けられしとは、實にヒュームの卓見なりとす、遂には道德的精神爲めに薄弱となりし、極普通の原理と雖、批評的精神の攻撃に對し不動なる能はずなりぬ、例へば離婚の許可若しくは親族結婚に關しての規則の勵行せられざるが如き之れなり。加特力教の如きは、公然とは斯く墮落せざりしも、事實に於ては之れと同様なり。此墮落は精神的權力の政治的に衰壞せるより初じまる即ち道德精神が人の情を支配す可きものなるを却つて其の爲めに壓倒せられしに由る。

以上消極哲學の生起及び之れに相當する社會的危機に就き述べぬ、今や之れが完く發展したる處如何を見るあるのみ、之れ然かも前者の繼續したるものに外ならず、新教の主義に次に自由神教の結果を添ふれば、即ち之れが歴史的發展の次第を見る。吾人は爾後精神的解體を見ん、而して遂には俗世界的權力の破裂と共に社會の新組織を爲すは最後に知らむとする處なり。

新教に由り根本義を與へられしからは、其結果は、消極的哲學の組織的なるもの補助ある無きも、自ら發展するを得んとし、別に斯かる批評的教理を須るすとするが如くむば、之れ人智を過信したるものと謂はざる可からず。先づ新教に於て殊に理性が尙ほ神學的組織の時にありては、如何に之が人類の自由を與ふる上に妨害となりしや測る可からず、英國及び合衆國に於て、基督教の教義を悉く排し去り、唯聖書の研究をのみ事としたりしが、然かも其聖書の外に出づるものは之を嫌惡したりぬ、其他新教は批評的精神を輸入し來りしもの、其れが無くて善き限り之を却けしかば、遂には、其進歩的要素を缺き沈滞に陥らむとす、乃ち革命的激動の生ずるありて、社會に進歩あるを得せしめき。抑も異端的要素は希臘時代に既に

ありしもの、當時自然科學未だ整はざりしも、其結果は形而上學的萬有神教のみ、これにて宇宙を以て抽象的に神視せるもの、畢竟今日の無神教に外ならざるなり、此思想加特力教の隆盛と並行して存しぬ、此宗教上の抗議は、當時の諸々の神學組織の徒らに壓虐を加ふるものより脱する唯一の血路なりき。

消極的哲學は第十七世紀の半頃に組成せられ、其生起は、智的運動に由りて大に助けらる、そも實證的精神は是れ迄曖昧なる科學的研究をのみ事と爲したりしが、此第十七世紀以降其哲學的性格を發揮し來り、形而上學にも神學にも對抗の位置を取りぬ、然かも尙彼に結びて之を斥くるの事を爲せり、其勢力は即ち信仰にして、理性に由り論證せられぬものは、之を拒斥すとの事を以て之を有しぬ、斯くも理性的ならしむるの事は、實に革命時代の精神的卓越の證なりとす、知識ある人士は之に由り得る處ありしも、一般人民は斯く一方に科學的精神の勃興せると在來の神學的教義との間の衝突の爲め、其宗教的論知を危うくせられぬ、ガリレオの地動説出で、不信行者を加へしは、ジユースト教徒の陰計、說教を以て之を救はむとするに優りぬ。

消極哲學の權勢は時の事情に應じて示されし人の善惡の情性に由り影響を蒙るあり、宗教的解放の精神は、自由の個人的行動の精神と密接の關係を有す、而して第十七世紀の衰滅に類せる執政權に對しての争鬭は、批評的精神を喚起しぬ、其組織的となりしもの之れ即ち社會進歩の唯一の普遍的機關なりとす、一方に斯精神は人性最惡の部分と隨伴す、人をして虚傲の念を起さすも之れが爲めなり、傲慢の精神は各自皆同等の權力との聲を歓迎す可し、要するに消極的哲學の構成を爲さしめし心的勢力は、有力なる道德的のもの、加ふるに由り一層強大ならしむるを得可し。

批評的哲學の歴史を稽查するに當りては精神的の事件を俗世界のものとして分つを忘る可からず、後者は革命的教義の政治的行動に缺く可からざるもの、然かも之れあらむが爲めには、先づ精神的のもの、存在を豫想す、哲學的自由精神は最重要のもの、之れよりして政治的のものを得たればなり、之れ分れて三となる、(一)批評的教義の組織的構成、(二)心的解放運動の一般的弘通、(三)精神的のものと補充的關係にある政治的解放之れなり。

其第一のものは、第十七世紀に生じ最進歩せる新教より出で、英國、和蘭等の新教の主動力たりし國々にいつの間にもやら擴がりぬ、此氣運を導きし三大人はホッブス、スピノーザ、バイルとす。スピノーザは、其哲學を以て學問を事とする人心を解放するに效ありしが、之をもて消極哲學の祖先と爲す可きにあらず、蓋し氏に先ちて既にホッブスのあると、未だ充分に社會的の用を爲さざるとにあり、バイルは之れを有したりしが其舊組織を攻撃するに於て未だ組織的たるを得ず、吾人はホッブスを以て此革命哲學の父と稱せざるを得ざるなり。

斯哲學に於ては、形而上學的精神が許す限り、反神學的主張を行へり、由りて今之れと實證哲學とを比較せむに、前者即ち消極哲學は之れ畢竟古代哲學の發達し來りたる最後の體形に外ならず、之れと同一の資質を有しあり、即ち同一の絶對的精神を認む、唯彼にありて「神」とせしもの之れにては「自然」と形を變じたるに過ぎず、此の如き些少の差異を以てしては、未だ以て神學的時代の社會組織と異りたるものを出す能はず。實に實證的學の出で來りて、總てを自然法に由り説明し去らむとするに至りて、初めて新時期に入るものとす可きなり。

道德的方面よりして之を觀れば、自愛の説を初めて定めしは此形而上學的哲學なりとす、即ち自我の説よりして自然生じ來るもの、後に或は道德性其中心を求めて慈愛若しくは正義に由らんとせしが、之れ遂に以て此誤を正す能はず、抑も此自我中心の事は之れ神學的時代の個人救濟の思想を傳承したるもの、實證哲學が個人的利害心を離れて考察するを得るのものと同じからざるなり。

其政治的方面は精神の權力を俗世界的權力の下に屈從せしむるの事なり、而して之れはホッブスに至り最完全に示さるゝを見る、彼は批評的哲學を以て唯在來の精神的組織を打破する事に止め、社會的の方面に關しては、新組織の來る迄暫らく其儘に爲し置かんとす、然かも彼の書中見るものをして、往々彼れが之れを以て社會恒久の體形と思惟せしと誤認せしむるものあり、兎に角斯く精神的方面の事をのみ事とし、政治的のものに容喙せざりしとの事は、統治者をして安臥せしめしかば、其主張を爲すに當り好都合なりしなり。

消極哲學の由來此くの如し、在來之れが少數知識の士の間にも如何に解せられしかを述べしなるが、更に進みて之れが如何に弘布せしかを見んとす。先づ見る可

きは、此新革命的状態が運動の中心と其恒常機關を改變せし事にあり。舊來の神學的及び軍隊的組織を打破するの事は先づ獨和英國に行はれぬ、是等の諸國にありて新教の政治的の勝利は、斯教が許す丈の保守的組織と結びて進歩的精神を止め、哲學的の解放も中和して最早其勢を缺くに至る、之れより以來人心の解放の事は新教と伴はず、むしろ墮落せる加特力教にも劣るものあり、之に反して加特力教國にありては、實に兎に角に智的自由の殘存せる處なるが、嚴密なる壓制より脱する唯一の處は消極哲學にあり、斯くして智的と社會的運動の中心は加特力教國殊に佛國に移りぬ、之に伴ひ其機關も變り來る學者文人なる階級の生せるは此時なり、然かも未だ哲學的發展の充分のものなく、消極哲學を組織的に生出する能はず、然かも一朝眞正の哲學者に由り基礎を定められんか、之等の人々は其説を繼承して、之を一般に弘布するには最適したる人にして、其點は純哲學者よりも一層有效の事を爲したるなるべし。

是等の文人學者出で、哲學を唱ふるに及び、愈々其價を低め下りぬ、此方にはヴォルテアあり、此派は、スピノーザ、ホブス及びベイルの教義を自由神教に迄至らしめぬ、之れにて宗教組織を打破するには充分たり、之れが弊害は人をして便宜的僞信を懐かしめ、且又此運動の眞正の方向如何を知る能はざらしめしにあり、之に屬する人々は自由神教をもて其終極と爲したるが如けむも、之と同様に其先輩は、ソシニウス派にて若しくは、カルヴァン派にて或はルテル派にて其終極のものなる可しと夫々考へたりしなり、其一に次で他のもの、生起せるは、必らずしも前者が失敗したりとの故にはあらざるなり。

以上は第十八世紀に於て爲す可かりし哲學的運動の史の見解なり、唯表面的に舊組織に反對し、且つ又極めて薄弱なる論理を有せる此主張が此時代に成功せし所以のものは、全く之れ近世社會の必要に伴ひしが故のみ、數世紀前には何等の影響をも爲す能はざりしならむ、破壊的學派の努力は、今や社會の諸方面よりして歓迎せらるゝあり、之れ當時此消極哲學を必要とすとの一般人士の確信より來りしものゝみ。

消極哲學の政治的行動を觀む、之れ、實に人が精神的方面の組織の解體を充分に遂げ一轉して俗世界の方面に向ふに及ぶや、必らず生起す可き大破裂の準備的事

業となるものなり、新哲學は人の知識に訴へ、新政治は人の情に懇へ、由りて其確固たる勢力を占めぬ、斯かるもの、生來し斯かるもの、行動を執るは止むを得ざるの處なり、哲學漸く一般人士に擴布さるゝに従ひ、其に従ふの人益々平凡となり、其性格も益々低卑のものとなり了す、之れと同時に一方には、俗世界の狀況亦貴族政治の墮落等に由り益々腐敗を生ず。此時に當りルソンの出で、哲學本來の目的は道德並に政治の改造にあり、然らずば之れ竟に無益の智的騷亂に終らむのみとの事を疾呼せざりしならむには、批評哲學亦終に無用の長物となり了せしならむ、併しルソンは情の人到底哲學を建設するに堪へず、批評哲學を推進したる結果、之を消極的に解し社會打破を唱ふるに至る、斯くして眞の社會改造の事は放擲されしもの、如し、其之を爲すは實に實證哲學に俟つあるのみ。

消極的政治學派は通常ルソンの之を代表すと思惟せらるゝが、經濟學者が舊社會組織を打破するに與りて大に力のありし事を忘る可からず、其主張に曰く、政府は最早産業的進歩を指導する能はず、蓋し其力となしたる軍隊活動衰へ其有せし特權を喪失し、爾今商業的戰爭となれるものに容喙する能はずとす、之れを大に唱へ

しものをアダムスミスと爲す、然かも一方に個人主義を唱へ無政府を主張し、道德の無益なる事、政府が科學、美術を獎勵するの無用なるを説くに至る。其結果は延いて擾亂に至らしむ。

此消極哲學に隨伴する智的並に道德的害惡に就き一言、せん、知識は深き確信に乏しく統一を缺きあり、蓋し重大なる問題を併せて斯かるものを解決するに最早適當なる人士に任じたればなり、而して其社會運動は詭辯者や談論者に任せ、最慎密なる攻究を要する事も、擧げて人の情に懇へ解決し去らむとするあり、加特力教は一般の嫌惡を受くる甚しく、或は之に代ふるに他神教の組織を起さんとし、或は哲學的教政を以て之に代へんとするあり、知識方面既に斯く混亂せるに道德獨り完きを得ず、其行爲の判斷の如きも、擧げて人々の個人的良心のに任せるあり、加特力教の道德律は甚だ可なるものありと雖、滔々として人心之に反抗するの勢は如何ともす可くもあらず。而して之に對して起りし此新哲學は其極自由神教に迄至りしが、其根本原理とするなる精神的解體に由り道德亦打破せられ去りぬ。此くの如くにして上來孰れのものを見るも不結果に終りぬ、其之を建設するは

實證哲學に待つあるのみ、請ふ以下之を見む。

第十一章 實證時期の成素の興起——社會 新組織に對する準備

在來過去五百年間に亘りて、社會舊組織の分解の過程を觀察する、退屈なる仕事を爲し之を終了したりしかば、以下之れと時を同じふして行はれし社會新組織に關する一層愉快なる觀察を試みんとす。

新社會組織の紀源を定むるに當りて、新社會階級の生起と、是れが傾向の最初表現との間に、或間隙の存するを忘る可からず、斯く見れば、近世社會の組織的産業が特殊の資質を有して表はれしは、第十四世紀の初を以て之れとせざる可からず、諸方面より見て、之れ近世の始源なりとす、此時に當り産業的膨脹は政治組織中の不動の要素を占むるものとして、一般に認許せられぬ、産業の聲盛んにして、之れと同時に傭兵の制起りしが如き、當時の人心既に産業的生活に向ひしを知るに足る、羅針盤、鐵砲の發明ありて、以て商業の活動と呼應し、又一方にはダンテ、ペトラルカ

の徒文名高きあり、科學未だ幼稚なりしと雖、自然哲學が特殊の學問となりしは、此時にして、哲學の興起に至りては、之れ極めて晩近のもの、而して形而上學的精神とスコラ學風との混淆とより成りしと雖、此時實に根本的改新の近けるを示しぬ、以上諸方面よりして之を見るも、第十四世紀を以て近代文明の最初の時期を構成するものと謂ふを得む。

斯くして、新社會成素の發展は、舊者の衰滅と歩武を一にす、初めは舊組織なる加特力教勢力を占めありしものから、之れは唯之れを搖がす丈にして、之を攻撃し之を破壊するに止まりしなり、然かも一神教的哲學が充分に政治上にも權力を占むるに及びてや、其全力を舉げて科學的若しくは美術的經路に向ひしなり、斯くして舊組織の衰滅と新組織の生起の一致との間には、偶然ならざるものあるを見る。

其開發の次第は、普遍的にして簡單のもの、特殊的にして複雑なるものは前との大法に由り定めらるゝなり。之れ單に思辨的意想に於てのみ然るにあらずして、實證的の物に於ても亦然らざる無し、理論的たると實際的たると個人的たると集合的たるとを問はざるなり。

是れを適用する方法は、一大線を書し極劣等の物質的行爲よりして、高尚なる精神的行爲に至る迄悉く之を貫き、其普遍性、抽象性を加ふるに従ひて之を上せ、之に反して複雑の度を加へ、従つて日常の用を爲すに益々近きに従ひ、之を下すれば此處に一の表を見るを得可し、之を見るに、其高くなるに従ひ、人類の特性なる高尚の性格を知る可し。

此連鎖は、其繼續の中にありて、夫々のもの、活動する様式如何に従ひて、之を分別するの必要なる、實に動物體統に似たるあり。其分類中にありて第一に最重要なるは實際的生活と思辨的生活との別にして、在來俗世界的と精神的とに分ち來りしもの之れなり。實際的生活は單に人が自然に加ふる行動にして之を細分するの要なし、後者に至りては、之を美的思辨と科學的思辨の兩者に分たざる可からず、斯くして近世文明の規畫三段となる、產業的、又實用的、美的、又詩的、科學的、又哲學的にして、此順序は自然的のものなり、皆一般的に必要なものにして其求むる處のものは夫々次の三方面に相當す、(一)善、即ち有用的、(二)美、(三)眞、之れなり、普通に人は此順次を以て適當なるものとせり、即ち情的のものを以て智的のものに優らしむ。

併し合理的には此逆か眞なるなり、孰れにせよ美的成素は兩者の中央に介在しあり、之れ近世文明の靜的分析の合理的を爲すもの、由りて又其動的方面の基礎を爲す。更に又一の細分を試むるの必要あり、科學と哲學と分つの事之れなり、根本的に云へば二者一なるも、今日二者其性質に於て大に異なる點ありて同一視す可からざるものあり。古代希臘に於て、自然哲學と道義哲學とに分ちしものに復歸せざる可からず。由りて分れて四となる、產業的、美的、科學的、哲學的之れなり、唯忘る可からざるは、此最後のものは暫らく斯く爲したるの事之れなり。

以上四者は常に同時に存在すと雖、其本質上、其發達は區々たるものあり、而して規畫の中に於ける彼等の位置を定めしと同一の理法が、其發達の次第をも定め、而して其一興起すれば、由つて以て他を促すあり、科學の進化と產業の進化との間に於ける交互作用に關しては云はずもがな、人は往々にして、美的進化と爾餘の二者との間に於ける關係に就きては之を輕々に看過するものあり、人性の實證的理論に従へば、文藝の修練が科學及び哲學を催進するものたり、然かも逆に立てば之れが彼を資するあり。

今是等のもの、紀源に關し理論的討究を爲さずして、之れが歴史的に發達せる次第を検すれば、吾人は上記の規畫を向上的に見ざる可からず、即ち近世文明にありては先づ産業的方面より進み遂に哲學的のものに至る可きなり、之れ古代のものと異なる現象にして、産業は實に近代の特産物なりとす、古代にありても精神的方面の發達は之を見たり、獨り此方面に於て缺如する處ありしなり。近代に於て産業の進歩は、知識を進め、由りて社會に餘裕を興へしむるや、人をして心を美術に傾かしむ、若し夫れ産業的精神が科學的精神を進むるの關係に就きては言を俟たざるなり。斯く實際的には向上的に進み來る、其合理的なる向下的のものにありては、今日の學問未だ理想的にあらざるが爲めのみ、即ち社會學の發達したる曉には、此事を見るを得可きなり。古代の神政的時期にありては向下的なりし又社會が哲學的に組織せらるれば斯くある可し、併し今日の事實に於ては規畫の中の部分の各のもの、中にありて然り、而して全體としては向上的たり、由りて、過去五百年に亘りては向下的のもの、向上的のものとの二者が併行して行はれしを見る、即ち向下的とは其各部分の中にありてなり、向上的とは之れ等を通じて相互の

關係に於てなり。

中世に於て農僕制の起りて、奴隸制に代るに及びてや、在來農民が家畜の如かりしものが社會的權力を占むるを得るに至る、よしや極めて貧しく又安固ならざる地位なりしにせよ、家族構成の如きは之を爲すを得たり、之れを第一着と爲し、之れよりして幾多の權力を得來るもの故、田舎を以て人民自由を得るの場所と爲しぬ、此事自然封建時代の君主をして農業生活に親昵せしむ、故に此時に當りてや、一般に之を云へば、田舎生活の方、都市に於けるものよりも優れるを見る、此時に當り人民を諸方に普ねく分つの事行はれぬ、外的には入寇を防ぎ、內的には又之れと同様の方法を以て、人を驅りて不毛の地にも移民を事とせしむ、此時之れ一般的に自由を得しの時にして、個人的奴隸制度の廢止は之に次で來らむとす、次の三百年即ち第八世紀の初より第十一世紀に至る迄は、産業生活への最後の準備的時期にして、之れは一般の奴役制に次で來る可きものなりとす。

以上は之れ俗世界の狀況なりしが、其精神的方面を見るに、愈々個人的自由を促進せしものあり、奴僕は其主と同一の宗教を有し、同一の根本的教育を受くるあり、

斯く唯に宗教上の實權を占めしに止まらで、人を解放するの事を以て、基督教本來の義務なるを認められ、第六世紀以來君主は個人的自由を與へ奴隸を解放するに至る。

此變化の初に當りては田舎の方都市よりも困難の尠かりしは上述せる處然るに自由運動は、却て田舎よりも都會に於て盛に行はるゝあり、蓋し農業は其仕事とする處簡單にして其日々の行事定まりある故、敢て之を刺激して自由を得むとの念を起す尠し、況や君主は常に其中にありて爲めに人をして之を得るの事困難ならしむ、之に反して都市にありては、工業主は直接に其事に與らずして、代理者に任しありて、勞働者は愈々逆境にあり、且又其任務は農業の如く一定せるものにあらずして、複雑にして變化多く、之に従事する各自の自由行動を要する愈々切なるものから、彼等を驅つて之に赴かしむるなり。

そも政治鬭争の始源は、集團が自由を得しを以て之れを爲し、然かも道理其之を得しは如何にしてか、偶然か然らざるか等の事は敢て問ふ處無きなり、今之を明にせむとす、個人的自由を得ると集合的自由を得るとの間は極めて短時期のみ、蓋し

後者は嘗に前者の必然的結果たるのみならず、後者ありて初めて産業的進歩を見る可ければなり、加之此時に當りては、この抵抗力漸く薄らぎ來りしものから、益々其成功を早めぬ。此二者の間は第十一世紀の上半期位のものゝみ。封建制度極めて無頓着なるものから、之を其中に容れ加特力教は之を起して以て其教の爲めにせんとす。

上來述べ來りし如き變化は、在來人類の經驗せる世間的變化の最大なるもの、古代の希臘哲學者にして奴隸廢止せられ、自由民其職を執るとの事を耳にせば、大荒誕なるに駭かむ、社會の進化は歸する處到底初めに人の思辨せる處のものゝ、意表に出づるを見る。此新时期に入るは之れ吾人の本性に適したるもの、蓋し勞働的生活は定まり來れば吾人の有する諸性質を圓滿に發達せしむるに適し、彼の軍隊生活の如く畸形的のものとなり了せざるなり。

産業的生活を以て軍隊的生活に代へしは、確かに社會人の原始的體形を一步進めたるものなり、先づ、産業的生活は人類の大多數が凡庸なるに際して最適切なるもの、蓋し之れに在りて、人々或局小の部分に關しての知識を有すれば、由りて以

て文明的生活に於ける彼此の簡單の問題を解して以て其れに相當の報酬を受くればなり、次に産業的生活は平和のものなれども、軍隊的生活は常に人をして殺伐の念を懐かしむ、或は産業的生活を難じて、其が徒らに人の利己心を充すに過ぎずと云はむか、之れ實に未だ其當を得たるものにあらざるなり。蓋し産業的生活は未だ其生來の儘にして、之を彼の軍隊的生活の如く組織的のものと爲したるの後にあらざれば、未だ以て兩者を比す可きにあらざるなり。

是れが家族的生活に及ぼせる影響は頗る大なるものあり、即ち在來家庭なるものを知らざりし奴隸にも之を構成するを得せしめ、在來の自由民と雖、心は常に戰場等に向ひしものから、家庭の眞趣味を解せざりしなり、或は産業的組織にありては、婦人亦職業を得て爲めに家庭の圓滿を缺くが如きの恐ありとせむも、此時に當りて職業は大抵男子の占むる處となり、婦人の職としては家庭の事を殘さるゝに至るなり。

然らば此新組織が社會に及ぼす處如何と云ふに、此産業的生活にありては、古代の門地を尊びし代りに産業に由りて得たる富を尊み以て階級制度を打破するに

至しりなり、加特力教にありては、僧侶の階級を破り、人の賦能に應じて之を適用せしなるが、之に對して産業的生活にありても、亦其方にて斯かる事を行ひ、微細の社會的機能に至る迄然らざるは無し。代々父の職業を世襲的に爲すよりは社會の事情に従ひ、又其人の賦能に従ひて之を改むる事を必要と爲せり。産業的組織に於て缺如せる處のものは、主として其構造に不完全なる處あるに由ると次では人性の不完全なるに歸す可し、然かも之を以てしても、尙ほ奴隸制度や、戰爭時代に勝るもの萬々なり。此産業主義を以て人類に臨むに當り、例へば彼のハンサ同盟の如きは其主なる標型ならむが、未だ彼の軍隊的のもの、如くに嚴ならず、之にありては其命は死を以て従はざる可からず、然るに彼にありては命に反するの餘地あり、而して由りて以て協同の必要なるを愈々明にし、愈々相互の間和解的となる。人類結合を初めしは軍隊制度なりしが、未だ之を以て盡されざりしのみならず、到底又産業制度が之を完ふするのに比す可くもあらざるなり。

市民の自由を得るの常の必要となりしは上述の事に由りて明けし、而して其之を爲したるは、組合にして、各組合の成員を合體し、而して先づ個人的産業を保護し

たり。恣に職業を轉換する事を防ぎ、産業の風習を定め、以て新生活に必要な道徳的影響を加へたり、是れは之れ近代社會の特色なる普遍的、恒久的、自由の紀源にして、個人的自由の當然の結果なりとす。

是れが精神的方面に於ける關係如何は推測に難からじ、其加特力教の精神の大體と一致し且つ又其政敵に對しての同盟を爲すものとして、之れに歡迎せられぬ、而して一方には又當時の哲學の神學的色彩を帶ぶものと一致せざるあり、蓋し神學教義は其設立の時に當りてや、將來如何の事情の出來するや、抑も又之れに應ずるの措置如何の如きは敢て問ふ處にあらざりき。由りて遂に此新事實の生ずるに及びて、之に對しては極漠たる制裁を加ふるを得る位の事のみ、然かも往々にして社會の實情に當らざるものあり。

斯かる衝突あるが爲めに、勞作者は敬意を以て大體に關する僧侶の關涉を受くも、直ちに去つて俗世界權力に下の赴くなり、而して之れは彼の如く左程に激しく己れに關涉する處無きものたり。貴族と富豪との間に社會競争の生ずるに先ち産業社會は、貴族を(奢侈なるを以て)生産の大原因なりとし、其道徳的鍛練の積

める處は個人修養の模範なりとせり、故に孰れの點よりしても、封建制度は産業には不斷に益する處あり。

産業政治を處理するの事は、初め僧侶若しくは貴族の掌中に歸しぬ、其利害とする處は産業社會のものと結合しあり、由りて近代の幾多の宗教講社、又は舊き大家の或者が之に貢縁して其勢力を保てるを見る、併し此新政治に對して特別階級のやがて生ずるあり、法律家即ち之れなり、無力の弱きにせよ、之れによりて初めて産業社會をして克く其求むる處に従ふを得しめしなり。

革命的時期の五百年を以て次の如き三部分に分つの事は讀者の記憶する處ならむ、(一)舊組織の自發的衰頹の時(第十五世紀の終に迄及ぶ)、(二)之に次ぐの時期は組織的に破壊せるもの、分れて二となる、消極哲學の新教時期(第十七世紀の半頃に及ぶ)、及び自然神教時期、即ち其れ以後を占む。産業的進歩亦是れに平行するあり、其然るは偶然にあらず、抑も舊組織の倒れしは、加特力教と封建制度が産業に對し抱きたる同情と又一方には政略と俗世界の主權者をして、新進の社會力を己が味方と爲すの必要を感せしめしとに由る、而して一方には、又産業制度は漸く獨立を

圖りつゝありし階級の士をして、愈々在來の羈絆を脱す可く刺激したり。是れよりして當時歐洲の大都會は文明の中心たりしが、遂に諸々の人民を其方に引附けて勢力は軍隊制度のものに勝るあり、傭兵生じ、初めは假りのものなりしが、後には恒久のものとなりしぬ。人々相率ゐて舊主より脱して、産業の先導者の方に赴きしものから、愈々軍隊組織の壊滅を早めぬ。

王者と貴族との間の闘争に在りては、産業者は其味方する處、時と場處に由り同じからず、然かも常に同一の主義の下に之を爲す、即ち力弱き方に黨す、蓋し之に由りて、以て常に相互に忠節を盡し、遂には勝利を占めんとてなり。故に産業者は佛國に在りては、王者に黨し、英國にありては貴族に黨するあり。

曩に奴隸制度は器械發明に不便なるを説きしが、今や之れが反證を示すの時期となりぬ、即ち羅針盤、武器、印刷の發明の如き、續々として發生し來りぬ、羅針盤の如きは二百年前に發明されしと雖、之を改良し實用に適せしめしは、第十四世紀に至りてなり。彈藥が之れ以前に發明せられしや否やは知らざれども、火器を率爾として使用せるは之れ此時代の特色なりとす。最後に印刷術の發明に關しての誤

見は、社會の進歩の全線を之に關聯せしむるにあり、實は之れ唯之を弘布するの有益なる手段たりしにして、由りて間接に之れを鞏固にせしに過ぎず、他のものと同様之れも亦當時の社會的産物にして過去三百年間に亘りて陰々として潜勢力の伏在せしもの、迸出して之れとなりしなり、古代にては人類大部分は奴隸のみ、讀書子なるものは、極少數の人士に限られし時は、通常の方法を以てして書物を傳寫すれば足る、然るに中世に至りては、僧侶等讀書を事とするもの多くなり、書物の多數を要するの勢人を促して印刷術を發明せしむ。

最後にヴァスコ、ヅ、ガマ及びピロムバスの航海は大に當時の人心を驅りて外に向はしむるの結果を生じぬ。

第二期即ち新教の時期にありては、實證的と消極的との二者が前の如く相一致しつゝあるを見る、産業的運動は調整を來し、又革命的運動は批評哲學に従屬し來りぬ、勞働者は最早厄介視せられず、蓋し之を味方にするは己れに利なれば王者と云はず、貴族と云はず、之を其政治組織の中に入れんとす。

此時に於て、産業的運動が組織的となりしとの一證は殖民組織の生起にあり、是

れが近世社會の進化を進めしや將た止めしやは好個の問題なりとす。一方よりしては、海運に盛に軍隊的精神を増し、之に伴ひ文明の度の低き諸方にあるの人民を化するに宗教を必要なりとし、斯くして此二者握手して暫らくの間其勢力を繼續するものゝ如かりき。然るに又一方にありては此殖民により産業を愈々發達せしめしは明なる事、歐洲一般の進歩は、此新事件により進められしは疑ふ可からざるの事に屬す。

奴隸制度に就き一言せんに、近者新教の徒の尙ほ此制度存在の必要を唱へ、之れあるによりて初めて野蠻人を進歩せしめ得可しと爲すものあり、然れども之れ妄も亦甚しきもの、古代と今日社會事情が同じければ兎も角、然らざるを其制度を其儘に襲用せんとす、吾其可なるを見ざるなり、奴隸制度は文明の進歩に益する處無し。

第三時期はユーグノー教徒を佛國より追放し、又英國貴族の政治的權利を占めしより佛國革命に至る。前時期にありては、産業の發達は軍隊の優先權の必然的基礎なりき、然るに今や其順を變じ來り、戰は變じて商業的戰爭となり、干戈を以て

見ゆるの事其勢力を失ひ來りぬ。

産業の其他の點に關しては、歐洲大陸に於けるよりも英國に於ける方著しく進歩したりき、蓋し此國に於ける貴族的精神と新教的精神との密接なる關係は在來産業生活に屬したりし自信と利己的精神に最便利なりしなり、之に反して、大陸にては加特力教勢力を占め其社會性の大なる或は平等的精神なるに加ふるに君主と産業社會との間の密邇ならざるは、獨り英國をして盛ならしめし所以なり。併し此産業の暫時的優勢なるは或は不便なるあり、蓋し之れと軍隊的と神學的組織とが同體せるものから、之れをして愈々久しからしめ人をして飽く無き貪婪を恣にせしむ、斯くして英國にては將來之を償はざる可からざるの患あり。

産業の内部組織は諸種の氣風の人に趣味を與ふるの特質に由り尠からず影響するあり、斯くして之れが社會的に必要となるに従ひ、益々有爲の人士をして之に接せしめ、無能のものは軍隊に入るに至る。又公債組織の擴大せる事は之に先ちて産業の發達を要するありて、愈々之をして盛ならしむ。

以上産業的運動を其三方面よりして考察したり、曰く加特力教及び封建保護の

下に於ける自發的生起、曰く政治上優勢を占めんが爲めの手段として、政府の爲せる組織的獎勵、曰く在來主權を掌したりし戰爭をして之に従屬せしめ、以て歐洲政治恒久の目的と爲しぬ。以下之れと同時に、行へる智的運動を見んとす、即ち次の三方面よりしてなり、曰く美的、曰く科學的、曰く哲學的之れなり。之れは前者程重大の價無く従つて極簡單に之を見んのみ。

美的能力の作用は、人類感情の理想と其表現を爲すにありて、由りて以て當時文明の度を計量するの唯一の標準とは爲し難し、此事丈は、軍隊的組織の時も將た又實證的組織の時も同様に之れ有りしなり、由りて今之を攻究するに當りては、其社會との關係如何になりあるやを見るを要す。中世にありては加特力教の伽藍神體等を製作する爲めに之れ大に獎勵されしや事實なり。茲に忘る可からざるは當時の言語の状態に由り尠からず阻害されし事是なり、蓋し言語は人類思想の反響にして、其發達極めて遅く一朝一夕にして之を完うす可くもあらず、人類の美的製作の最上のものたる詩歌音樂皆之れ言語に俟たざる可からざるに、斯くも不完全とならば如何計り之を止められしやは察するに難からざるなり、従つて又爾

餘の美術にも影響を及ぼしぬ。

此時代の知識の主要なる現象は、其新機軸なると通俗的たるとにあり、之れ當時の社會状態より受けたるものなるを證す、當時の讀書社會尙ほ羅典の典籍を誦するを廢せざりしなる可きも、如何せん此古典は最早時宜に適せず、當時の社會組織は昔日のと異り徒らに曩時の事を誦せるもの、遂に用を爲さざる所以なり、由りて此處に此新文明に適したる文藝美術を産出するに至る。

在來の如く中世を以て、第五世紀より第十四世紀に至る九百年間を包含するとせんか、此時期に於ける美術の状況は其時代の産業の状态に一々符合するものあるを見る、農僕起りて奴隸制度に代るや、新社會状態は文藝の生出に材料を供し、又其機能に刺激を興へたりき、市民が個人的に自由とさるゝや、文藝は近世の語學の準備を事とし、又都市の産業政治創められ、田舎人士遂に自由となるや、當時の文明の性質に従ひ、直接の進歩を致しぬ。シャルマーニュの御宇は此中頃に起りしが、新文明の要素に有效なる刺激を興へたる時期と見るを得む。以下産業的文明が加特力教及び封建時代の文藝に及ぼせる影響の如何を見んとす。

其第一は心的活動を喚起し、又文藝の存するを得るが爲めの餘裕を夥多あらしむ。心的刺激は先づ大なる缺乏する處のものをあらしめ、之に由りて未だ以て大なる快樂の伴ふあらざるなり、而して又一方に、科學的若しくは哲學的研鑽は人を勞苦せしむる事甚だしく、非凡の人にあらざるよりは到底之に堪ふ可くもあらざるなり、美的機能の活動は其極端に走らず、中庸の活動の快樂を與へ、且つ又思想と情操とが程能く混和し以て普通の人士にして克く之を享受するに適せしむ。斯くして美術は活動的生活と思辨的生活との間の適宜の推移を爲すを得せしむ。産業的生活が軍隊的生活に代るに及び、美術と實際生活との關係愈々密邇となりぬ、由りて之れが彼れに加へし影響の多大なるは敢て説くを須むざるなり。

美術は其が自然的便宜を有するに係らず、過去五百年間の批評的時期にありては其性格は消極的にして其影響は不確實なりき、其主題を選むに當り、人々の一般に知るなる古來の風式を採らむか、即ち加特力教のものを之れとせんか、之れは漸次其勢力を失墜し來るなるを以て一般の人心を繋ぎ難し、然かも又新思想は未だ一般に行渡らざるものあり、之を以て彼に換ふ可くもあらず、斯くして自然の結果

として、俗世界の主權と結び國體を異にするに従ひ、其表現を別にしたり、斯くして歐洲全土に擴りぬ、然かも國を同じうせざるに従ひ反目の狀にある可きが、又一方には普遍的に賞讃さるゝの價值あるものを製作して以て國の別を忘れしめ、人々をして皆同胞の念に充たしむ。其經路は産業的のものと同様、先づ自發的にして次で組織的となり終に近代政治の目的となりぬ、第一の時には萬般の文藝之に關與せしが殊に詩歌之れが主たり、ダンテ、ベトラルカの如き之れなり。

普通文藝の更生と稱するもの此時期の中ば頃にあり、併し實は更生にあらず退歩なり、蓋し此時爲す處のものは徒らに古代の作を崇拜するなるが、然かも其は當時のものに適せざるものたればなり、宗教上の論争よりして許多の害惡生せしは云へ、其主なるものは希臘羅典の作を渴仰したるに由るもの、此くの如くむば、遂に美的製作物の創造的のものは到底達す可もあらず、例へば當時の堂宇の如き其技術に於ては或は勝れるあらむも、到底中古の伽藍に比す可くもあらず。

第二期即ち文藝の組織的獎勵の時期に至りては、當時の科學に比して、一層便益のあるを見る、蓋し政治に平穩を加へずして、一般に幾多の活潑なる同情を盛なら

しむるを得たればなり。帝國や加特力教たるは、貴族政治や新教たるに比し、一層文藝に比し、好都合たり、蓋し彼にありては、善く統一を附し以て一般の社會の同情を惹起するに適すればなり、英國にありても、エリザベスの一時的わけてはクロンウエルの爲せる貴族に對して主權を掌握したるの事あらずは、近世文學の精華なる沙翁や彌兒頓を出す能はざりしなるべし。

蓋し夫れ第三期に至りては、文藝の進歩亦産業と同様となりぬ、在來其光輝、人望よりして保護せられしもの今や嚴として文明の一部を構成し、政治亦規則正しく之を奨勵する獨立をもて必要と爲しぬ。文藝家亦獨立して他の扶助を仰ぐを要せず、古人の摸倣も終り、近代のとの比較評論初まりぬ、此時には、モリエル、フィールディングの徒を出しぬ。

此度は上と同様に科學的進化を見んとす、而して之に次では哲學的のものを見ん、二者の別一時的のものなるは既に説きしが如し。之を終りし後、是等の總結果としての精神的及び俗世界的組織を見ん。科學的と哲學的の機能は其勢力は極めて弱しと雖、之れの與ふる大體系に由り吾人と周圍の宇宙並に人類との關係を

知るを得るなり。中世に於て古來の神學を消耗し次で科學的となる前に形而上學的のものを生じぬ。

科學の進歩は中世に初まる、希臘時代のもの極幼稚なりし。自然哲學と道德哲學との兩者を別ち其簡單なるものは、他とは離れて存し、他が未だ神學的時期に彷徨するに、己れは既に形而上學的時期に至れるなり、由りて自然哲學は加特力教教義の體系以外にありたり、其中に入れられし時はスコラ學風にして既に哲學的趣味を帯び來る。多神教より一神教への遷移は、科學的精神には好都合なりし、蓋し多神教の時にありては、萬物を擧げて神的に説明し、些少の研究す可き餘地を殘さず、之に反して一神教にありては、唯漠然と全體を通じての一原理の存するのみにして、其細目に至りては、むしろ人々の討究を待ちあり。

當時の科學的產物としては、占星術と鍊金術の二者あり。彼の之を以てオッカルトサイエンス學と爲すは非なり、蓋し之れ古代の迷信の殘物にあらずして、覺束なくも新實證主義に由りしものなればなり。

是れ近世科學進歩の起源にして、産業が其補助を求め、又美的進化が人心をして

之に嚮はしむるの手段たり、以下之が後の五百年に經過せし次第を觀んとす。科學は産業の如く實用に近きものにあらず、又文藝の如く人に深き同情を惹起するものにもあらず、極めて淡々たるものたり、當時科學の歡迎さる可きは僅かに占星者若しくは鍊金者としてなり、此處に足場を得て其攻撃に對す。其理論的方面の發展に關しては未だ以て稱するに足るもの無し。

其第二期に至りては、コペルニコスよりニュートンに至る迄の運動に由り、天文學の基礎を定め延いて他の學問にも影響を及ぼしたる事に由り長足の進歩を爲しぬ。君主政體の方貴族政體よりも科學には好都合たり、蓋し後者にありては、成る可く之を實用に供せんとするものから、以て一般教育に資し其に適する如くならしむ、即ち政略の材料にす、前者は反之、學問をして自由に其研究を肆にせしむ。

思辨的方面の大運動は二個の經路を行きぬ、然かも相互密接に關係す。(一)科學的即ち實證的、(二)形而上學的即ち消極的之れなり、前者は數學天文學に關し、後者は科學的精神が舊哲學に反抗してなり。

科學は其研究に従事するに當り、當時の優力の哲學即ち形而上學と神學とに抗

せざる可からざるものあり、此事は、コペルニコス、ケプラー否タイコブラへの時に既に初まりぬ。數學及び天文學に關し種々の進歩ありしが、茲にガリレオが重力學に爲せる眞實の創造を忘る可からず、之に次で、音響學光學に於ける諸々の發見生じぬ。

茲に特に注意す可きは、實證的精神が眞に其社會的性格並に其一般的影響を有するに至りしは此時にある事之れなり、即ち科學と矛盾する處のものは古來信仰をも斥けて其示す處に従はんとす、之れよりして百年の後地動説は嚴肅に法王の認容する處となりぬ。

第三期に至りては、美術と同様産業を奨勵する事之れ政府の確然たる義務となり、之を忘るれば一般の非難を喚起するに至る、之れと同時に、自然哲學が軍隊及び産業と關涉の度を愈々密ならしむるものあるや、益々科學の社會的勢力を強大ならしむるものあり。

此期に於ける科學の進歩は數學界に於て二經路を取りぬ、一はニュートン式にして、天體機制學の逐次的建設にして之れより合理的機制論の諸種の理論を生じぬ、

他はデカートのものより出でしにして、之にライブニッツの分析的刺激を加へ數學

的分析の發達並びに幾何學的及び機制的概念の概括を致しぬ。

之れを要するに、當時は科學専門の最好時期と稱す可く之に従ふものベーコン及びデカートが特殊の分析は單に一般的綜合の必要なる準備に外ならずとせる思想を忘れざりしなり。

哲學的進歩は、其分岐するの事は常に科學の進歩に待つものあり、希臘哲學に於て、自然哲學が形而上學的となり、而して道義哲學が未だ神學的たりしは之れが爲めなり、中世のスコラ時代には一時之を混せるものありき、故に吾人の檢覈せむとするは其後年にして兩者の別愈々判然たるものありし時にあり。

スコラ學風は、其形而上學的精神の社會的勝利を實現したりぬ、其方法は己れ加特力教に知識の補助を與へし代りに己が欠陥とする組織的の無能を之に由り補はれて以て然りしなり、此哲學が無機世界より人類界に來るや、其神學の風を改め在來信仰に由りし處のものを皆條理に由り説明せずむば止まざるに至る、彼の自然神教なるもの即ち之なり。斯くして神に對する古來の觀念と自然の實在に關

する新觀念との間に衝突的二元論を生じぬ。

此争は西班牙を除きては歐洲文明諸國を通じて之れ有りぬ、蓋し之れ人類の未來を定むるもの之れより重大なるもの無し、英、佛、伊には夫々次の如き代表者あり、曰くベーコン、曰くデカルト、曰くガリレオ之れなり、皆之れ實證哲學の建設者中にありてガリレオは純粹の科學をのみ事とし、之れが哲學的研鑽には至らず。デカルト及びベーコンは夫々舊哲學に反し以て新者を建設せんとす、然かも二人其境遇の異なるに由り其學風に差別の生じたるは哲學史の示す處なり。

此時に當り政治哲學改新の準備は既にホッブス、ボッシュユに由りて爲されぬ、之れより先きマキャヅェリは或政治現象を純乎たる自然的原因に由り説明せんとしたりぬ（よしや失敗したりしも）、次でホッブス起り、人の原始的社會を以て争闘にありと爲しぬ、よしや其中誤れるもの無きにあらずと雖、社會組織の恒常なるもの、中自から臨時のもの、發生を要し、且戰闘體形なるもの、必要なるや明けし。

第三期は之れ第二期の延長のみ、蘇格蘭學派は道德に關し非常に好都合たりき、即ち當時の諸國の種々の事情を離れて、全然獨立の研究を爲すを得しなり、ヒューム

因果律を研究す、然かも之を全然科學より分別して考ふ能はず、又アダム、スミスの科學史殊に天文に關する研究の如き、併せて實證哲學の二大人と稱して可ならむ。政治哲學も亦前世紀間に大進歩を爲しぬ、蓋し社會進歩が歴史研究の明なる主題となりし以來愈々然り、もとより進化の學說の缺けしものから、未だ以て之を充分に爲すを得ざりしは止むを得ざりし處とす。

此期に屬する一大觀念は人生進歩を以て確固たる見解と爲したるにあり。而して之れは唯科學進化の一般よりして初めて生ずるを得るもの、蓋し眞實の進歩なるものは唯前後親子關係の次第の連續に外ならざればなり。

以上中世よりして佛國危機に至る迄の進歩の概觀なり、併し是等は其個々のもの、研究に止まり、之れが全體を大觀するに當りては、諸處に罅隙の存するあり、以下之を補填して其全體を見ん。

如何のものも、己れと己れの屬せる全體との關係を知らずば、一般的觀念を離れて唯特殊の見解にのみ陥らむ、斯かゝる事よしや避く可からざるにせよ、遂には反社會的のものを致さむのみ。産業、文藝、科學、哲學の如き近代の社會状態にありて

は皆組織的構成を得ず、由りて夫々の進歩は夫々のもの、本能に任せざる可からずと爲すあり。此觀念の根本的弊害を示すには是等の四種の進歩が、皆原始的經驗主義に由り阻害されしとの事に加ふるものあらざる可し。

産業は近世社會組織の骨子なるが、其教義とする處は形而上學的のものから、之が組織と相反し衝突を爲しぬ、産業的進歩は、先づ都市に集中し、其主體たる可き農業は依然として舊規程に従ふものあり、斯くして兩者の間に先づ衝突を來すあり、又神學の規定以外にありて、之れに關して戒むる道德的教戒の如きも僅かに斷片的に過ぎざるあり、即ち之れが統一を缺く。

美術は舊組織より別れ今に一般方針又は社會的歸趣のある處無し。哲學は他と孤立せる不合理の状態にあり、之れもとより其本性に反するもの、蓋し其は包括的のものたればなり。

科學が特殊となるの非なるは前章既に説きしが如し、其最完全とするものも尙ほ此歎すべき境遇を脱する能はざるなり、殊に無機科學に於て然りとす。

以て西歐諸國を通じて、社會の舊分子より新者の生出しつゝあるを見る、而して

或時には必要なりし分限的氣運が今や妨害を加へつゝあるやを知る。舊組織再びす可からず、然かも之に代る可きの新組織は之を知る可からず、當時の社會は歸趣する處を知らずして空しく混亂の中に彷徨するを見る。

第十二章 革命的危機の回顧——近世社會最後の氣運の確定

社會更新の爲めの二種の進歩は其度に於て同じからずして、消極的の方、積極的のものを超え、由りて、社會新組織の必要は其方法の知られざるに先ち、愈々逼り來りぬ。次で起りし社會の大破壊は、もとより痛惜す可きものなりしとは云へ、又止むを得ざりし處、之に由り歐洲人士に社會の改新の近けるを示し、舊組織は唯此破壊に由り去るあるのみなるを示しぬ、而して其影響は、加特力教國たると新教國たるとに由り同じからず、前者たる佛國は産業に於て英國に優り、美術にては唯伊國に後れしのみ、哲學亦舊束縛を脱するに歐洲第一なり。

此動亂は先覺の士に由り夙に認められし處、而して三大事件に由り之を明示せ

られぬ。(一)ジェスト教社の廢止、(二)チュルゴーの大改革案、(三)亞米利加革命之れなり。此最後のものは歐洲全土をして直接に利害の感を抱かしめしが、わけても佛國の受けし利益の多大なりしは彼が米國に與へしものに對して受けし處ありしに過ぎざるなり、此國新教にて麻痺し去られ、將來の發展を知らず、唯消極的に事を行ひしのみ、之に對し積極的に憲法を定め、形而上學的時期に至らしむるの時來らむとす。

其初に當りてや、舊組織の原理とする處は其弊害を除却して、尙存する半を得るの望ありたりき、然かも此時たるや、未だ初期のものにして、一時的のものを以て恒久的のものと誤認したるが如き之れなり、佛國革命の第一に試みし事は、民權を昂めて王權に抗せむとす、蓋し舊組織の成素は悉く此王權に集中したればなり、然かも未だ王權を全廢せむとにあらず、兩者を並べて立憲政體を爲し、又加特力教義と新哲學とを結ばむとす。佛人は英國を摸し之に倣はんとす、然かも第一英國は例外國たると、第二には、彼我兩國に於ての特色とする處のもの同じからずして、全然一に於て爲されしものを直に他に移す可きにはあらざるなり。

革命の第二期至るや、國民議會起りて、舊組織を破り、王權廢滅を以て、社會更新には避く可からざるものと爲しぬ、當時舊組織の事々物々此王權に集り之を保つる事は、やがて舊組織を保持するの事を意味したり。階級制度の最後のものたる此者は久しく其實權を失し、其事を擧げて、部下に任じ去り、而して部下は漸く之れより背反せんとす、況んや社會の複雑を來せる政治の事、到底世襲的方法を以て遂ぐ可きにあらず、必らずや人材を待ちて然る後初めて之を處理するを得可きのみ。此佛國革命が僅かに一國の事に關せずして、普遍的性質を有するの事は、歐洲諸國が同盟して之を鎮壓せむと勉めたるにても知らる、英國の如き寡頭政治にして王權の主張が其存亡に直接に影響する處無きに係らず、率先して之に當りぬ。此くの如くにして、此革命の第二期のものが愈々其名聲を高め、永く之を後昆に傳ふるあり。

一時的政治の終結は、佛國が外國の侵寇に對して充分安全なるを得たるの時にあり、然かも時の激越なると、消極哲學の弊害とは、之を久しうして初めて完からしめたり。在來ヴォルテア學派とルソウ學派とは相提携して進み來りしが、此處に

於て分れぬ、前者は進歩的性質を有し、代議政體を以て過渡時代止む可からざるものとし、後者は之に反し、退歩的にして當時の如き例外的組織を打破し、直に新組織を試みんとす。一はよしや不整頓なるにせよ、近代文明の明瞭なる考を有し、後者は唯古代の社會組織を摸倣せむ事をのみ力めたり。

國民議會の統治終るや、此度は逆戻りをして、立憲の事を爲さむとす、唯無暗に英國の風を摸しぬ。所思社會は全然己が欲する儘に之を處理するを得可し、過去の事は顧るを要せずと、而して其道徳とする處を全然法律の下に従はしむ、斯かる動搖的のもの進歩を加ふる無く遂に王政に歸す。其れよりして生ずるものは軍隊政治なり、ナポレオンポナバルト風雲に際會して起ちしも、彼もと一介の武辨のみ、兵を行ふの術に於て古今に獨歩せむも、政治の事に關しては全然盲者と同じ、唯古の神學的軍隊的組織を破りしとの事の外は何等の爲す處も無かりし。

ナポレオンの失墜は佛國の爲めには幸福なりしなり。然かも彼れが計畫したる帝政は、其後佛國に再興し、ブルボン家の帝位を踐むを見る、ブルボン家王位を繼承するの事久しきに亘るを得るのもの、如かりし、然かも、ナポレオンの再來は歐

洲全土を擧げて佛國に抗せしめ十五年間其統治者を更ふるあらしむ。

再び立憲の議起り更に英國の議院制に倣はむとす、帝國政體の殘骸が貴族制のものに相當するものゝ如かりし、併し人民一般に産業の増進を冀ひ、爲めに平和を求むるや切なり、由りて新政體は當時の社會事情に適せざるにも係らず、直ちに其容るゝ處となりぬ、英國にては王權は殆んど附庸の如く然るに佛國にては然らず、斯くして、不完全なる王權と民會の不完全なる行動との間に衝突起りぬ、斯くして統一を缺き各王權を握らむとして之を得ず、此二黨派の争闘は革命以前の狀態に復歸し進歩的と退歩的とを標榜しぬ。今や或固定的組織生じ、此兩者より其主義とする處を採り、然かも其に由り他を無効ならしむるものたり。例へば加特力教が法律と主權を掌握しながら又一方に宗教との自由を唱ふるが如し、斯かるものよりして生ずる政治と道德との結果知る可きのみ。望無き反動が一度革命運動に對して起るや直ちに仆れぬ、蓋し人民は唯平和と秩序とを求めしのみならず、亦進歩を要求したり、故に此最後のものを與へざる限りは到底満足せざるなり。前ブルボン家の逃走に次で來りし政治の特色とする處は、智的、道德的の政府な

るものを全然斥けしにあり、當時の社會唯是れ現在の事にのみ之れ急にして、即ち目の當りの物質的方面の處置にのみ醒醒として到底其他の事を處置するの餘裕無きなり。即ち其組織の極めて不安定となるは止むを得ざるの事、蓋し之れが常に恣なる野心家の爲めに擾亂せらるゝの機會あればなり、乃ち其費用は嵩み來る、而して此くの如きの状態をして繼續し、精神的方面は全然顧みざるや、遂に之を擧げて三文記者の横議に任ずに至る。

此結果は全歐洲に彌蔓せしめぬ、佛國は實に之れが先鋒のみ、進歩の萌芽は佛國に於て失敗するや、其他の諸國亦阻害を免れず、唯其原因の明となるに及びて初めて之を再びしたるなり。所謂消極哲學は、到る處政治運動に關與したりしが、最も之を充分に示せるは佛國なり。而して其根本的に無能なる事を此處に充分に明示したり。

以上前半世紀間革命的危機の五時期を見たり、之よりして生ずる第一の事は、精神的新組織にあり。蓋し政治的氣運の悉皆は之に歸着するものたり。之を明にするに先ち、神學的、軍隊的組織の消亡と且又合理的にして平和的組織の生起の大

體を一瞥せむとす。

吾人の政治上の壊滅を致せるもの如何を、わけては之れが神學的部分を檢せんとす、蓋し之れ舊社會組織の主要なる部分なればなり。そも革命的危機は、舊精神組織の政治上、知識上、將た又道德上の主要なるものに斷乎たる打撃を加へて、以て其宗教上の解體を完うしぬ。神學的組織の知識上の壊滅は、矢張此革命的危機が宗教上の自由を全種類の人民に與へて之を甚しからしめたり。高貴の人宗教的束縛より脱出したる後、普通の人の屢々之に踵ぐものあり、例へばスピノーザの生涯の如し、此くの如くにして愈々宗教なるもの、用無きを示し來る。とは云へ、人の行ふ處、在來の習慣に基きて爲す處多く、之が證明に由りて代らむには知識の進歩を要し之が爲めに幾月の久しきを経ざる可からず、彼の迷信の打破せられむか、幾多人道の上に汚點を染むるの行爲の生出せむとは人の唱ふる處、基督教の普く布教されし後に於て學者政治家の多數は在來の多神教の壊滅に伴ひ、道德の衰ふるに至らむを憂慮したり。佛國革命の時に於て殊に然り、其勇氣其熱心多々稱す可きものありしに係らず、之れ古來の宗教が道德に加へたる勢力の結果にはあ

らざるなり。革命的危機が神學的統治を打破したるの事は之に由りて知らる。

更に轉じて政治的方面を觀察するに一の除外例とす可き大戦争のありしに係らず、革命的危機は神學的組織を打破したると同様、軍隊的組織をも破り了りぬ。

共和黨防禦の様式は、市民一般より之を召集し、少時訓練の後之を使役したりしが、却て在來の専門的のものに勝るあり、以て軍隊的階級なるものを不信ならしめぬ。殖民事業歐洲到る處に衰へ、殊に米國殖民地の獨立の如き一變化を來し、歐洲諸國が革命的危機に陥れる間に、遂に近代の戦を惹起す可き最後の普遍的事件去りぬ、扱あり得可き主義の戦争は、政府の配慮が外國に向ふに由りて之を制せらる可きなり、最後には徴兵制の實行、之れ亦軍隊制度を衰亡せしめぬ。

もとより今日にありて、歐洲諸國の大なる軍隊組織のあるあり、之れ公安を保持せんとの爲めのみ、即ち外國に對しての爲めの事は第二次とし此事をもて其主要の事と爲す、未だ智的並に道德的方面の整はざる暫らく之を借らざる可からざるなり、近時軍隊的精神は科學に待つ事益々急に、即ち實證的精神と相伴はざるなり、之に反して神學的精神は益々時代の精神と背反し來るものあり、初め二者相提携

し來りしもの今は別々のものと了りぬ。

以上は之れ前半世紀間の消極的方面なり、請ふ以下之れが積極的方面を觀む。産業的進化は前世紀の後を受けて進みぬ、革命的危機は、益々富の政治的影響を増大ならしむ、平和より以來此事愈々盛んにして、産業の進歩は社會の進歩と相並行したりき、其勢力は器械的使用さるゝに由り益々大となりぬ。併し備主と被備人との關係に至りては、事體頗る大なるものあり。前者は後者を庇保し、一般教育を施し誘惑より防ぐが如き寛仁の行には出でず、己が資本の運用の爲めには被備人を如何に虐待すとも顧みる處にあらざるなり。

文藝にありては、其主なる進歩は、近代文藝に於ける哲學原理の缺乏せる事と、古代の標型を摸するの見込無き事之れなりとす。荒蕪せる中にありて、消極哲學が奨励せし處のものには諸方面に亘りて不朽の作あるを見る。殊に私人的生涯と公人的のものと密接に關聯せる近代文明にありては、文學を以て之を示すの最適切なるを覺ゆ。

科學は此時に當りて、よしや赫々の人目を聳動する處無かりしとは云へ、尙ほ實

着の進歩を爲しありき。數學にありては天體機制論を完うせる外に、ブリーユエーは温度の均勢及運動を検し、其理法に由りて以て一般現象に知る處ありき。モンヂ並にラグランヂ亦幾何學及合理的機制論に貢獻する處あり。天文學は他の者に比して後れしも、尙ほ天王星の發見ありたりき、物理學にありては、マラス、フレネル、ヤングの徒あり、又一方にはヴォルタ、エールステド、アムペールあり、化學はラヴアジエーの爲す處多し。併し來らんとする時代に最大の影響あらしめし處のものは實に生物學の發生にありと爲す、ビシャー、ウィク、グジール、ラマルク及び獨逸學派ありて交々斯學に爲す處あり、由りて以て動物體統を完うするありぬ、實理的精神茲に迄達し、餘す處は唯社會の事にあるのみ、其之を爲すは、即ち今日の事と爲す。凡そ物表面あれば裏面あり、長點あれば必らず之れに伴うて弊害のあるは數の免れざる處、此科學運動に於ける弊害のある處を擧ぐれば即ち其餘りに多く生じ餘りに特殊的研究に陥り、遂に以て之を統一する處を缺くにあり。

近代科學がスコラ哲學と分るゝや、其當時にありては諸々の科學を特殊的に攻究するの必要ありたり。蓋し科學の形成や、夫々別々にして、其複雑の度を重ねる

に従ひ益々後れしなり。然りと雖、之れ實に其初期に過ぎざるのみ、之れ唯分析的時期のみ、之に次で総合的に全體を統一するの實證哲學來らざる可からず、乃ちベロン、デカルトの徒の出で、之を明にするや、當時の學者翕然として之に赴き、材料を集めて以て全體への一哲學體系を組成せむとす。然りと雖、在來特殊的に研究せる勢力の情性は尙之を適當の處に於て止む可からず、或は分析的研究と総合的研究の兩者の別を爲さざるに至る、人々皆己が研究範圍の内にありては實證的なるも之れが全體を通じては依然として古代哲學の奴僕たるものあり。爾餘の事にありては、人事皆統括を事とするに當り獨り、科學のみが斯く割據的の様にあるは歎す可きものとす。

更に轉じて哲學を見るも、是れ亦同様の状態にあり。哲學の一般的性質は克く科學の足らざる處を補ふを得可きかの如くなれども、實は然らざりしは悼惜の至りなりとす。第十七八世紀の交、科學は所謂弊れて用を爲さざる哲學を去るや、哲學は全然是等の者と離れて道德並に社會の事を計り、其方法に於て到底恒久の價を見る能はざるの者なりき、此正義を以てしては、近代の哲學はライブニツを以て

終りたりと稱す可く、氏以後コントの如きも尙ほ哲學の普遍的性質を忘れたしぬ。

原始哲學の精神とする處は、今も尙ほ往々にして見る處なるが、人わけては智的、道德的の人を其對象とし、之を全然外界より獨立せるものとして研究するにあり、即ち此點に於て眞實の定固なる哲學と全然反對を爲す科學が、實證的方法の驚駭す可き勢力あるを示してより以來、近代の形而上學亦争うて其哲學を之と合體する處あらしめんとす、ロックより以降此徵候著しきものあり、而して彼の「内省」の如き滑稽なる矛盾を生じぬ。之れ科學が觀察を事とするよりして、之を其儘己れに移したるに過ぎざるが、此くの如くむば、吾人の理性は自から活動せる時に當りて、當時に之を對象として、研究するの主體たらざる可からざるなり。然かも此事たるや、ゴールが腦髓の機能の研究を實證的科學と合體せしめむとするに當り唱出したる處なりとす。此誤解よりして種々無益の事思料せられ、今日の形而上學幾多の誤れる設想を恣にするに至る。此事明になりてより初めて哲學の眞の性質を知り來り、哲學的科學と科學的哲學との連絡之を遂ぐるを得可きなり、斯くしてスコラ時代に時期尙早の爲め失敗したりし事も亦之を遂ぐるを得可し。

以上を以て過去半世紀間の由りて人類過去の全體の歴史的見解の終局を告げぬ、由りて以て今日こそ、ベーコン、デカートの創めし哲學的改新の起らざる可からざる時なるを示す、幾多個人的の阻害ありしに係らず、事の駸々として皆之れに赴くものあるを見るなり、科學が眞の哲學的基礎たるや明けし、今此書の全體に包含せられしもの、結論に至るに先ち、過去の歴史より當然湊合す可く又未來が由りて出づ可き處のもの、精神新組織を見んとす。讀者は前後の幾多の事件の繼續的關係を忘る可からず、在來の消極的哲學は之を實證的哲學と分別す可きにあらず、其間連結する處あるを見る、人類文明の進化の理法は唯余の示したる處のもの即ち之れのみ、先に見たるが如く人類の進歩せるものは、神學的時代を過ぎ或ものは形而上學的時期にあり、而して更に他のものは實證的時期にあるを見る。而して此實證的方法に由りて人生の萬物皆其處を得るに至らむ、其次第は先づ智的、次に道徳的、最後に政治的方面なりとす。先づ智的方面に由り理論的に實證的方法なるものを明にし、其普遍性を知り、次に道徳的方面に及び、之を改新し更に又政治的方面に及ぼし、以て社會の改新を完ふするなり。

今日にありて、社會新組織には政治的行動よりも哲學的考察の方必要とする處あり。蓋し一時的の行動よりも、其根底とするものを要するや切なり。哲學者は汲々として原理原則に通せん事を之れ力めるに、政府は其頼む處は腐敗せるもの若しくは強制的勢力のみ、由りて哲學者の望む處は政府が人類の進歩に關涉する處無からむ事之れなり。

新精神的主權を構成するの人如何に關しては、唯消極的に其然らざるの人を云ひ得るのみ。今日現存する處の諸々の階級のものにあらざるや明けし。蓋し新主權の成素は、之を組織するなる教理が在來のと異なるに由りて、以て智的並に精神的に更新せざる可からざればなり。其成るや自然的に漸を趁うて化するもの、もとより一朝一夕にして忽如として出づるにはあらざるなり。

今や讀者は精神的主權にして全然俗世界のものとは獨立せるもの、換言すれば他の法律の人生行爲を督するに對し、吾人の意見、道理等を制する處のもの、其勢力を愈々加へ來るを見ん。抑も人生進歩の特徴は思辨的生活が實際的に益々優り來るに存す。此二者は當然分別す可きもの、理論と實際との別若くは科學

と技術の別の如し、然るに彼此二者を混同して以て野蠻時代の状態に復歸せむとするが如きは駭かざるを得ざるなり。加特力教が道德を以て、政治より獨立せしめし、事之れ極めて重要にして、之に由り道德神聖となり、以て人生德育の根底を構成するを得るなり。

希臘哲學者は、哲學者が政治を計らむ事を期しぬ。此危険なるは既に説きし處、中世にありて加特力教に由り智的欲求のものに満足を與ふるの事を爲し、以て彼が之に加ふるを止め得しが、彼は其壞滅と共に、再び二者混合を來しぬ、拔群の哲學者にあらざるよりは、皆己が抵る可からざる方面の地位を得んとして汲々たり。斯かるもの別に宗教的組織の之を制する無き時に當りては、金力の下に屈從するや當然の事なり。而して之れ實に今日の事と爲す。知識と道德の二者を混同して以て混亂を來すあり、蓋し富の分配の不平等なるよりして機に乗じて幾多の煽動者生じ、一方には又夢想者のあるありて、以て社會の秩序を亂すあり、此事は政事組織の如何よりは、其智的方面と道德的方面の序を失せるに基由せずむばあらざるなり。由りて將來にありては道德を以て主と爲し、之に由りて社會を組織す可

く他は之の屬たらしむ可きなり、是れ實に中世の説にして今日執る可きものなりと爲す。此くの如くにして人は權利よりは先づ義務を明にす可し、之れ道德の根源なればなり。

教育に關しては其方法に於ては加特力教のを模範と爲す可きなり。而して實證的教育にありては、實に智的のもの、みならず又道徳的のものをも併せて之を爲すを要す、加特力教の爲したる處は即ち彼の普遍的教育にあり、新教育の倣はむとする處は之にあり、教育を以て或特種の人にのみ限りて爲さしむ可しとのみにあらず、眞に人は如何の人も其能力とする處に於ては唯程度の事に止まればなり、次には、科學の如きも、今日の如く特殊的に分れある可からず、之を學ぶに先ちて之れが通論を知る可し、此くの如くにして、全體の關係に明なるを得可し、是れ余の常に唱ふる一般性に明なる所以なり。

大體此くの如きの中にありて道德は固く實證哲學全體の上に其基礎を置かざる可からず、人性之れ亦實證的知識の一部のみ、小兒の時は之を美習慣を以て陶冶し、長じては義務を以て束縛せば庶幾くは不可なからむ。道理は久しきに亘りて

神學の束縛を受けたりき。次では形而上學の關涉する處たりき、是等皆非なるもの、實に實證的時代に至りて初めて其實相を見る。

若し夫れ國際的關係を見るに、實に此道德的教育の必要なるものあり、形而上學的時期にては俗世界的權力が精神的のものをも其中に收め、従ひて一國が他國を併するが如きも皆此兵力關係に於てありたりき。さりながら歐洲の五強國到底同一政府の下に歸す可くもあらず、而して事實に於て彼等の間交通益々頻繁を加へ來り、是等に通じての國際的道德を立つるの要を見る、是れ實證的時代ありて當然云ひ得可きの事、宛かも加特力教時代に於て、其教を奉ずる國を以て一體と爲し他の多神教若しくは拜物教國を異端として斥けしが如くに此歐洲五強國以外は暫らく外に置く可きなり、併し彼の時と異り、漸を趁ふて是等をも亦己の中に收むるを忘る可からざるなり。

此實證的のものと、加特力教のものとの社會的性質のものは容易に之を知るを得可し、之にありては精神的主權は擧げて各自自由の依信に由る可く、而して其智的と道德的至上權に認められしもの以外より強められたる處のものたる可から

ず、世の進歩して實證的時代にありては、推理の力勢力を逞うし、之に違反する處のものは皆斥けられむとす。然りと雖、人智未だ完しとにあらず、其稱して實證的と云ふものも未だ至らざる處あるを免れず、之れ其社會的批評を要する所以なり。即ち穩健なる知識の普遍的に弘布さるゝを、幾多の假偽の誤りを傳ふるあり、之を匡す事、之れ社會一般の批評に待たざる可からず。

過去時代の成果よりして生ずる精神的新組織の何たるやは、以上示したる處、若し夫れ俗世界組織に至りては、之れと同様のものを爲す可からざるあり、蓋し其出づる處異ればなり、唯社會分類の大體の原理を見るに止まる。

先づ、公私の二機能の別を廢止せざる可からず、蓋し此別たるや唯苟且的のもの、決して合論的基礎の上に立ちしものには非ざるなり。人の爲す處のものは其公共團體たると私人的のものたるに論無く、以て一般の運営に資するあればなり。其列次の原理とする處は、科學體統の時と同様たる可し、即ち其現象の性質上單複の度に應じて之を爲さむとなり、此原理は各の科學の内部に就ても亦同様に之を施すを得可し、之を社會の事に應用しても亦同様にして、社會靜學の基礎は茲に

あり、而して之を動的に檢したるに、近代の社會作用亦之に基くを見る。此くの如きを以て其分類の原理に至りては餘す處なし、今尋ぬ可きは其材料とする處にあり、社會の材料之れなり、而して其終局のある處を知るに庶幾からむか。社會從屬の觀念は古代哲學と新哲學と比するに、其立脚地を異にするに係らず、歸着する處同一なり、前者にありては、人類を以て萬物の標本と爲し到る處其體統が社會分類の則に従ふを見たり。新哲學にありては之に反して、人類を研究するに唯生物學の一進歩を爲せるものに過ぎずと爲すなり。斯く科學と神學に於て一は人をもて動物と爲し、他は之を天使として解せるも同一の結論に歸するを見る。

之に由れば、最高位は、思辨的階級のもの、占むる處たり、一神教の時にありて、僧侶と實際家と分れしは、前者は其宗教的性質に於けるよりは、思辨的のものとの事を以て上位を有せしなり。是れ更に別れて科學的又哲學的と、美的又詩的の二者となる、前者は一般原理を明にし、後者は其が發現の能力に關す、前者の優れるや論なし。

實際的階級に至りては、先づ生産者と傳送者に分る、前者更に分れて材料生産と

其仕上げとに、後者は物品自身の傳送と其代品のとに分る、而して其抽象的となるに従ひ愈々高尚となるなり。即ち産業的體統は次の如し、(一)銀行家、(二)商人、(三)製造家、(四)農業家之れなり。

斯く其次序一度定まるや、其間に就て、最早疑ふ可くもあらず、下のものは上のに従ふも又之れと同様に其特權を有するあり。不平等に伴ふ弊害は一般に通ずる根本教育に由りて止むるのみならず、主として社會成員の上のもの、即ち其職能の一般性を有するものをして、愈々其道德的制裁を固からしむるを以て之を爲すを得可し。斯くして上下各其特權を保持するを得可く、下級のもの、如きは上級のもの程責任無く従つて自由を得るあり。

物質的重要の度如何に關しては、思辨的方面と實際的方面とに由りて其順序を異にするあり。具體的勞働は、社會に直接の用を爲すが故に、其規模の大なるに従ひ、益々許多の富を以て酬いらるゝあり、然るに思辨的のものにありては事之に反す、然るを之が價值の高下を計るにも、他のもの、如くに、富の多少に由らむとす、誤れりと謂ふ可きなり。

曩に社會上の仕事が公私の別無く併せて社會の用を爲すと云ひしが、其は其遂行せる處に於て然るを云ふにして、其方法にはあらず、方法には公私の二者あり、個人が教育に由り進めらるれば進めらるゝ程、公の事は私人的事業に任せ置き、之れが監督の勞を省くを得可し、併し思辨的のものは然らざるものあり、其社會上の有效なる事間接に過ぎ、高遠に失し以て遂に私人的事業として、個人の勇進を促すに至らざるなり、之れ其公的作用を要する所以なり。

實證的體統の夫々の階級の構成に關しては、無論全然自由なる事を忘る可からず、即ち誰れにても其器量に應じて如何の處にも抵るを得るの事之れなり、之に由りて、無能のものゝ空位を擁するより斥け、利器を懷抱するものをして、路に當るを得せしむ。

精神的權力は如何のものにせよ、人民一般に亘るのものたらざる可からず、蓋し其爲す處は以て社會的運動を指導するなる道性を建設するにあれば、若し之れが唯少數の人士の間にのみ行はるゝのものに止まらむか、何等の價無きに至らむ、彼の加特力教の如き將た又新教の如き皆此くの如きの者あり。之れ遂に效無し、期

する處は、思辨的階級のもの、一般人民との間に連絡を保つを得せしめ、以て後者の道性を昂むるにあり。此くの如くむば其社會的幸福を進むるに於て優れる事固より政治の及ぶ處にあらず、之れ即ち、實證哲學の期する處、知識を多數の人に擴布するを得るに由りて然りと爲す、此くの如くむば、人亦政治組織の不完全なるを知り、之に強ふるに其能はざる處を以てせざるに至らむ。又之に由れば富の少數人士に止まるが如き憂ふるに及ばざるなり、蓋し期する處は社會全般の進歩、其富が少數の人士に止まると多數の人に擴布さるゝとは敢て問ふ處にあらざるなり。

新哲學が社會に及ぼすの効果は此くの如きが、遂に又社會の之に及ぼす處のものあり、即ち思辨的の人士と實際的の人士とは、各其特む處異り、前者は道德に一般を律せんとし、後者は全力を以て立たんとす、而して一般人民は教育道德を前者より受け、雇傭並に物質的の扶助を後者より受くるありて、共に其恩人たるものから、雙方に附し以て平衡を保持しあり。

新組織成るの曉に於て、人民一般が新精神的主權に關與するの事必要なりとの事たるからは、其に至る迄の時にありては、尙更之を必要とす。斯くして精神的主

權を認むる事一般人士に重くなれば、之れと富との衝突の場合にありて、其向背を決する容易なる可きなり。

社會今日の秩序進歩の状態と、實證哲學に由りて生ずる處のものとの間に如何の差別のあるやは敢て云ふを俟たじ。新哲學にありては、實證的方法並に其教義を採り、現實問題の地位並に之を處理する方法を改むるあり。局部的のものは一般的のもの、下に降り、由りて義務を主とし、權利を其次と爲す、在來の如き絶對的の考に代ふるに比較的の語を以てし、由りて社會も進化的のものと解し、恣に之を製作するものにあらざるを見る。之れ其秩序的方面なり。進歩的方面に關しては、革命的のもの即ち之を爲すなるが、之にありても過去のものもを全然棄却すにあらず。併し其を以て絶對的價值ありと爲すにあらずして、之より一步を進むるにあるのみ、斯くして實證哲學は遂に社會進歩に致す事を得て彼の形而上哲學說と同じからざるのものあるを見む。是れは社會萬般の階級のものより賛成を受くるや疑なし、僧侶は之に由り精神的權力の回復を得、軍隊のもの亦之を賛し、之に由り組織の完うせらるゝまで、現實の秩序を維持す可く、科學、美學者亦己れ等を

昂むるものを非とせざる可く、産業學者亦之に由り人民の衝突を防ぐを得る故、歡迎す可く一般人民もとより之を賛するなり。

以上は主として西歐強國を主として説きしもの、爾餘の諸國の未だ之に至らざるものは、其準備的時代として之に至るを力む可きなり。佛、伊、獨、英、西之れ即ち其主として攻究す可きの處なりとす。

社會の過去を稽へ未來に及ぼし、之を以て余の卷首に述べし企圖を全うしたり。道德並に政治に關し確乎たる信念を缺ける時に其根底を示し、實際的方面の風潮高き時に際し、哲學の價值を明にし、相率ゐて特殊的研究に赴く時に當り、之れが全體に通じての包括性を示しぬ。是等は實に新哲學の教ゆる處、極めて重要な事に屬す。將來の社會學は左迄困難の處あらず。蓋し之に由りて其方法を明にし且又其大體の歸趣する處示されればなり。蓋し大綱既に擧がる、其細目に至りては自から決せられむのみ。此くの如きの科學的基礎即ちアリストテレスの爲せる自然哲學や、中世時代のスコラ學風並にベーコン、デカルトの精神を萃めしものと謂ふ可きなり。唯殘れる仕事は、以上説きし處のものを六個の根本科學の

形に分ち、其方法、教義並に、實證哲學の總轄の三目の下に排列するあるのみ。

第十三章 實證的方法の究竟的評價

六大科學の如何は既に之を見たり、之に由り數學よりして社會學に至る體統的次第は、以て益々實證的哲學に進むものたるを見る。一方にベーコン、デカルトより、他方にケプラー、ガリレオより得たる思想を合して、以て哲學的と科學の合同を試みたり。今は其等よりして成りし幾多の概念を適當に排列し、之を以て一大原理の下に置かんとし、此くの如きの哲學的統一之れ實に社會組織の第一義なりとす。

主なる問題は、思辨的成素の中の孰れが最高位を占む可きものか、換言すれば、科學體統にありて數學と社會學の中の孰れが上か、數學(天文學を含む)は、其起源よりしては最上たる可く、社會學生物學を基礎としては、其歸着する處に於ては最上にある。前者は現象界の全般に亘りての理法を示す、もとよりの事にして、然るに後者にありては、云はむとす、凡そ思辨は如何のものとも雖、人類の思辨的進化の結果

なる故、其結局たる實證を完成したるを以て最高等とせざる可からずと、爾餘の物理學、化學の如きは此中間に位するもの、もとより價の之に並ぶ可きものにあらざるなり。

數學は人心が實證哲學に至る迄の久しき練習期間は當然勢力を占め、而して社會學は一朝其基礎の充分に固めらるゝに及びてや、己れ獨舞臺となりて思辨の指導者となるものとは余の説とする處なり、此事最重大の事なるが、由りて以て過去三百年に亘りたる哲學者と科學者との論争に鐵案を下すに足る。即ち前者は實證性を主張し、後者は一般性を唱へしもの、之に由りて調和せるを見る、人類の進歩を以て自然法に由り説明し得たりし前は、人々實證性を採りて一般性の方を斥けぬ。蓋し後者は舊哲學と關聯せるものから、彼を捨つれば當然之れをも去らざる可からざりしなり、然るに今や然らず、實證哲學の全般に亘るに由りて、此二者の合體せるを見るを得たり。

余は全篇を通じて數學は之れ實證性の根源たるを見たり。然かも又數學的觀念は其本質上純乎として、完全なる普遍的哲學を形成するの不可能なるを見ぬ。

然かも過去三百年に亘り、既に朽敗せる哲學に代りたる哲學を建設せむとせるは皆數學的原理に由りてなり。此中に在りて恒久の價あるものは、デカルトのもののみなり。併しそは社會及び道德の方面を忘れしものから、到底不完全たるを免れず、數學的方法を以てしては到底之を超越る能はず。之れ今日に在りても依然として障害を爲しあり、實證的思辨が普遍的結合を爲すを見んとは、反對の二者即ち數學的のものと社會學的のものとを比較するを要す。

數學的精神の求むる處は主として方法論にあり。而して研究法は其學の愈々複雑を來すに従ひ愈々其特質とする處を發展するあり。斯くして科學者が夫々の科學の實證的程度を示すなるが、之れは社會學に至り其極に達したりと謂ふ可し。蓋し幾何學者の爲す處は未だ以て其方法の初期たるを免れず、社會學者の爲す處に至りて之を完全に運びたるなり。新哲學は舊哲學に比して、前者は比較的精神を、後者は絶對的精神を有すると爲せり、而して數學に於ては、此比較的精神の見る可き無し、實に數學的演繹の極めて平易なるは、往々人をして吾人知識の界限の何處に存するやを疑はしむるものあり、總てを推論に由り遂げんとす。觀察を

顧みずして論證に由らむとす、誤れりと謂ふ可し。健全なる生物學的思辨にありては、歴史的研究法を唱ふ、之れ實證哲學の第一義にして、之に由る社會學が卓越せる所以なりと爲す。是を之れ論理的評價と爲す。

是れが科學的評價を見るに、之に於ても亦普遍性の點に於て社會學が他のものに擢んづるあり、幾何學的並に機制的見解は總ての現象に通じて、事物の延長並に運動に關しては、普遍的に其理法の行はるゝものなりとは云へ、如何のものにありても、直接の事物、無くして之を知り得可きなし。而して其事が極めて重要な部分を占めあり、而して數學的原理が單に無機物界を占めし間は未だ差支も無かりしも、之を以て社會に及ぼさんとするや、誤に陥りぬ。道德並に社會的事業にありては他の事を要す、實に數學は物理化學の範圍内に於てする萬能の勢力あるとにあらす、其領域を縮められて天體內と爲されしも、此中に於てすら尙ほ或ものは任意的の性質を有するを免れざるものあり。

見地にして眞に普遍的のものは、唯人生あるのみ、更に之を云へば、社會的のもの即ち之れ。是れ外界の事を研究すると將た又人生を研究するとに論無く常に歸

來する處のものたり。而して人類理性は唯社會的境遇に於てのみ發達するを得るもの故、社會大觀を爲すを得るに至る迄は之を遂ぐる能はじ、而して之れ實に今日に至りて初めて之を爲すを得るものなり。今日社會學の研究尙ほ不完全の様にありとは云へ、能く思辨的體系の流通を完うせしめ、以て之を統一あらしむるを得るなり、即ち一原理を以て全體の科學に通じてあらしむるを得るなり。

故に云はむとす、統一の哲學的原理は社會學に由り供せられ、數學にあらずと。抽象的科學は思辨的研究の主題なる可きが、之れ具體的科學の基礎とならざる可からず、即ち其中にある哲學的原理を明にするに於て、初めて其合理性を得る事となるなり。而して數學は分析的研究のみ主とし、現實事物の研究には頗る不適當なるものあり。社會學は之に反し、其抽象性を有しながら、同時に綜合を主とするものから、自然事物の研究に資する多く、蓋し是れ寧ろ後者に近く前者に遠ければなり、故に具體的研究の一般に要する處は、抽象哲學の遂に其抽象性の最小限に至りし處の科學を以て其極致と爲すを見る。

若し夫れ産業に關しては、尠からず疑ふ可きものあり、蓋し無機界の事に關する

を以て、幾何學的並に器械的の知識を要するあり。然るを之れ衰ふるとなり、彼れ亦然らざるを得ざればなり。併し余は云はむとす、斯く産業の如きもの、進歩を妨ぐる事は、由りて其れより高等のものをも亦然かさすとの疑ある無きなり。次には新社會に於ける思想感情が、以て之を害ふと迄には至らざるなり。而して又新方法に由りての綜合主義を以てして、在來獲得したる知識を整頓さするの事大に益あり、何ぞ必ずしも在來のもの、如くに分析的方法を以てして新者を集むるの事をのみ事とせむや。此社會學的方法に由り、以て此大事業に必要な總ての科學的方面を結合するを得るものと謂ふ可し。

斯く統一を附して初めて人と外界とに關する知識の間に生じたる久しき對峙を破り去るを得可し、在來此二者は到底調和するを得ざるものと爲されしが、余の説に由れば、斯く二者を永久に結合したるものと謂ふ可し。近代哲學の傾向は知識を先にして、道德を後にするものあり、之れ傷む可きの事と爲す、然るを實證哲學は之を救うて餘りあり、而して之を爲すは人を以て個人的のものと思考せずして、人生として之を考察するにあり。近代哲學はデカルトとベーコンのあるあるが、

前者は主として無機世界の研究をのみ爲し、茲に於て普遍的方法を生じぬ。ペーコンに至りては之に反し社會的方面を注意し、社會學說を新に起すに力め、其爲めに自然科學の進歩を之に結びぬ。別にホッブスの如きも此系統に屬し、大に資するあり、此くの如くにして實證哲學は是等を併せて以て進みしものと謂ふ可きなり。是れ斯學の過去及び現在なり、未來に於ても亦之れが其れ以前の科學を打破するが如き事は思はれざるものあり。人心翕然として社會學に集まる、斯くして、プラトーン、アリストテレス以來の論争も茲に調和を得るに至らむ。

實證哲學が、古代哲學と異なる處は、主として其第一原因並に結局原因を討究する事を止め、自然法を構成する不變の關係をのみ尋ねんとするにあり、此考は最近の事に屬し、萬般の學が悉く此域に到達せりとはあらざれども、其之に赴く可きは當然の事なりと爲す。次では觀察と推理の受持つ各の職分を明にし以て一方に經驗論に陥り、他方に神祕論となるの弊を避けむとす、由りて一方にペーコンの所謂觀察せる事實、之れ健全なる思索の唯一の基礎なりとの事を許し、他方には唯事實の蒐集之れ科學にあらず、之を不變の理法の中に收めて、然る後初めて然るなり

との事を主張せむとす、加ふるに健全なる理論的指示に由りて、以て觀察を指導し愈々徒らに實驗的の事の領域を窄め來るなり。

次の特色は之にありては、思辨的斷案が普通知識の發達と一致したるにあり、即ち今や哲學の爲す處は、唯事物の理法を明にするにあるなり、實證的のものは彼の神學的若しくは、形而上學的思索と異にして、實に普通人の健全なる思想とする處を基とするのみ、唯之れと程度に於て異なるのみ、即ち之を總括し之を組織するあるのみ、吾人の由る處は、實に人心一般の説とする處にあるのみ、個人的のものは偏見に陥り易し、之に反して一般の人の是認する處に基かむは斯かる事ある無きなり、斯くして實證哲學は、人民一般に之に關與するもの、而して少數の人士が之を指導する處のものたるを見る。彼の神學の見解の全然之れと異なる處、吾人は實に社會學の見地が唯一の哲學の見解なるを見る。

健全なる哲學の根本原理とする處が總ての現象を不變の理法の下に置くにあるを見たり。此思想初めは唯神學的事物に於てのみ見たり、其之を社會的のものに見るに至りしは近き事にあり。此社會的のものに由りて初めて數學的のもの

の、及ばざる範圍にも之を及ぼすを得るなり。

是等理法の科學的本質に關しては二種に分つを得可し、即ち現象を結合する上に關しての事なり、曰く類似、曰く繼續之れなり、即ち一事實を説明するに其れと類似せる事に由りて、之を爲すか若しくは又前後の關係よりしてなり、以上は之れ吾人の知らむとする處にして又吾人の知るを要する限りのものなり。

論理的に之を考察すれば、是等理法は更に之を分つを得可し、即ち其生ずる根源が實驗的なるか將た又論理的なるかに由りてなり。併し二者其價值に於て敢て高下あるにあらず、一の足らざる處他之と補ふ底のものなり、科學の性質に由り二者の孰れを主用するやは、素より同じからざるものなりと爲す。

是等の考察は、哲學研究の實證的方法の二者即ち論理的と科學的の相關的性質を指示するあり、前者は觀察を主として、想像を後にするにあり、即ち古の作用と反對に出づ、討究の眞實の問題は理法を示すにあり。而して想像の爲す處は、建設せられたる事、其間の結合を附するの用を爲すもの、而して敢て其他に關涉し若しくは之を以て出發點と爲すが如きの事は爲さざるなり。是を之れ論理的方法と爲す。

是に相當する神學的方法とは他なし、實證哲學は其研究に當り、絶對的の知識に代ふるに比較的のものを以てす、事物の原因若しくは其生出の様式如何の如きは對絶的知識を得るの事を意味す、之れ神學的及び形而上學的時期に通じて存したりしものなり。コムトの爲せる處、實在を二ありとし主觀的と客觀的とせる處は實に卓見なりと謂ふ可きなり。然かも此歴史上の位地未だ完からざりし爲め、其哲學は實證的のもの、極に至るを得ざりき。而して其弟子亦之を遂ぐるを得ず。今や科學的進歩は、社會的思索をすら包含するに至りしものから、遂に彼の絶對哲學の壊滅を招致せざるを得ざるに至る。無機科學は人に對し之れと獨立なる外界を攻究するが、之に關する知識皆比較的たり、例へば重量の如き然り。生物學は個人を考察するに當り、心的活動は之を一の生活活動と見ば、有機體と其周圍との關係に歸するを見る、即ち二元論となる。社會に於けるも亦然り、是にて生物學の云ふ處愈々完全となり益々「絶對」なる者を打破するの事を爲す、之を靜的と動的との二者に分つに、前者に由れば、吾人の思想は吾人の組織の變化並に周圍の變化に伴ひ變化するあり、然かも有機的變化は之れ未だ假作たるを免れざるを以て、之れ

そは未だ其「絶對」との事止まず、不變の事依然存するに似たり。之に反して動的方面に至りては、有機體の變化不變化に關せず、吾人の心的進化を見る。斯くして形而上學的の不變の實體との事無くなる。絶對哲學破れて比較哲學生ずるなり。或は諸説の固定不變なるの疑あらむも、之を靜的に見て諸々の種類の生物が宇宙を觀察して、諸々の異説を出さむも、其は唯程度に於て彼我異なるのみ、其種の差にはあらざるなり。之を動的に見て、人間學説の變更、素より其根本的一般と衝突するものにあらず、蓋し其變化する處のものも進化の法則に由りて之を爲せばなり。以上之れ實證的方法の本質なり、次に其歸趣する處如何を(一)個人、(二)人類、(三)思辨的生活、(四)實際的生活の四方面よりして見んとす。個人に就きての理論的方面の職能は其眞知識を擴大し且つ又之を連絡するの二重の事を爲すにあり。古代哲學者の試みし連結は、豫め想像し得可き總ての場合に適合するを得るの説明を供へしものから、其を擴大するの事は之を爲すを得ず、唯吾人の時々刻々の行爲を定むるの理法を明かにするを得しが故に、知識の進歩に資するありしと云はむのみ。實に此第二の附屬的の實證性よりして、遂に純乎たる討究行はる。先づ吾人の概

念を連結し、由りて之を擴大し、次で之を過去のものと結びて以て之を完うするにあり、新事實の入り來るや、以て之を亂すの虞れあるも、此時に實證法の採る處は、是れ概念を是等の實在に従はしめ、以て起らむとする困難を排除するにあり、斯くして吾人の知識體系の調和を行ふを得。而して又吾人の概念が實在と一致するの證驗としては、吾人の考察に由りて之を證せられ、斯くして當時の事情が許す限り眞理に近きを見る。

若し夫れ人類一般に亘りても亦之れと同様のものあり、即ち多數の中に於て或特別の人士が之れの思辨的方面を掌り人類全體をして歸趣する處を明かにせしむ。人類全體を通じて利害とする處の同一なるからは、是等の全體の精神の疑りしものならざる可からず。彼の舊哲學者の爲したる處は唯各自の恣欲の極なるのみ、之を以て人民の聲と稱す可けんや。

在來本書の中にありて、實際生活に關する智的欲求を述べし時には常に余の見解の實證哲學の説と一致するを見たり。科學が一般に稱されしは、合理的行爲の基礎としてなり。然かも一度之れが實用に適するの事明かとなるに及びてや、益

々之を刺激して之を發達する處あらしめぬ、之れ其在來の神學的若しくは形而上學的のもの、無能なるものと異なる所以なり。

一度社會學生起するに及びてや、在來の欠陥を補うて餘りあり、數學あり、物理、化學の次で生來するあり、而して生物學之に次ぎしが、遂に社會學の出づるに及び、人間社會の上に理法を明かにするを得たり。在來政治的生活は極めて複雑にして之れをもて學術的研究に資する事を不可能と爲されしも、茲に至り之をも其中に併せ得るに至り。而して之れが實際的生活に用あるやもとより論無し。

實證的研究法の歸趣に關し、更に又一の暗示の存するあり、即ち其比較的、精神との事よりして、吾人が外界理法の實在を認むる限り、概念の構成上選擇の自由のありあり。科學的事業を作爲するに當りては、之に最適當の形式を與ふるを得、其研究に二種あり、(一)よしや其ものは實證的性質のものなりとは云へ、之を仕遂ぐるの難き事、(二)其尙早なるもの、併し考察の基礎として、或種の説を立つる事要用なるもの之れなり、一に屬するものは自然哲學中に起る幾多の問題にして、よしや實證的性質のものなれども、到底之を解釋し去る能はず、併し其實證性たるは、一層充分な

る討究演繹を一層明瞭なる頭腦の人に由り行はれたらむには、之を處理し得可しと考へ得ればなり、二のものは科學に於ける臆説の如き之れなり。

吾人理性の示す處、實證哲學は漸次人間思想の問題とする處を悉く即ち科學のみならず、又美術をも包含するの見込あるを示す、理論と實際とは、久しき以前より分れ、前者は抽象的のもの、後者は、之れが個々の實際問題を處理するものなり、社會學亦此別を明にし、敢て混雜する無し、又科學的と美術的との別に至りては二者直接の關係ありて、後者に由り、前者が大に益する處のものあるを見る。

是よりも一層近時の分類を云へば、抽象科學と具體科學との別にあり、抑も、第一哲學蓋し之れ全知識體系の基礎を形成すればなりなるものは根本現象の抽象的分析的研究に由らざる可からざるを唱導せしは、ベーコンなり、之れ抽象科學の事なり、此以後二百年間其分別に關し明瞭なる考ある無くして今日に至りしが、社會學の出づるに及びて之を完うしぬ、社會學は出りて以て第一哲學を完うし、其に由りて初めて之を完く組織するなるが、やがて、具體的問題の處理を爲さざる可からざるものなるが、さりとて實證的方法の行はれむは先に述べし具體抽象の別の存

するを必要とす。

以上實證的方法の組成を明にしたり、以下之れが自然に生じたる諸状態を其次第に應じて排列せむとす。

數學は之れ總てのもの、中、根本的性質を帶ぶるもの、其簡單性、抽象性、一般性なる等の事之を證して餘りあり、就中幾何學は分析的知識を與へ抽象性を示すもの、器械論に至りては之れより一層複雑にして、科學的學問の部分的に其前者よりも重要なるも、論理的學問の全體的には之に反す。併し數學丈にては未し、動的方面に至りては到底是が盡す處にあらず、由りて此知識の外に又他のものを要するを見る。

次に來るものは、天文學なり、即ち第二期の發展を爲す、もとより數學的知識を以て充てるも、之を出來得る限り斥ければ、兩者の別は、頗る多大なりとす、幾何にありては、用ゐたる觀察と得たる結果とは著しく異なり、觀察の機能をして、殆んど評價するものある能はざらしむ、之に反して、天文學にありては、最明瞭にして最直接的なり。科學的には、無機的知識體系中の最根本的のものにして、論理的には、天然現象

の一般研究の最完全なる標型なり、最舊哲學を外界より得たる概念に由り説明するは之にあり、又合理的實證性の最適當に叙列せられしもの、全體を通じて吾が概念と觀察との間の一致を表示するあり、其合理性に於ては實證性と同様充分なるは其取扱ふ處最完全に之を爲されればなり。

物理と化學は論理的には之を連結す可く、科學的には之を分つ可きなり、化學の論理的特色は其が組織的術語の術にあり、之を他にしては、物理學にて示されたる討究法を、より不完全なる方法を以て適用するに止まる、二者連結して、論理的に又科學的に兩極端の連鎖となる、即ち一方には、宇宙の研究を完うし、以て人生のものに至るの準備を爲し、一方には事件の複雑の度の間において實證的研究の中期に相當するあり。

次には在來の非活動的のものより轉じて活動的性質のものに移る、之れは在來の三者とは著しき相異あり、科學的に將た又論理的に前者に優るものたり。之に在りては分析的討究は僅に綜合的のもの、序幕として存するのみ、即ち科學的精神に於て根本的變化を致し、一般的精神が特殊的精神を壓し、前者を得むが爲に、後

者を爲すのは之れ亦在來のものゝ其位を異にする所以なりとす。靜的見解が明に動的のものゝと連結を爲して生じ來る。併し特に此ものにありて顯著なる現象は觀察法の進歩にあり。併し之れが生物の高等なる動物に入り、其腦髓より出づる道德的並に智的方面の研究に至りては到底之れが遂ぐるを得る處にあらず、之れ爾後の學即ち社會學に待つある所以なり。

何れの方面よりして之を觀るも、社會學は實證的方法を完からしむるものなり、爾餘のものは、皆之れが準備的のものゝみ、此に於て自然法則が完全に發展され在來の神學的若しくは形而上學的のものゝ如くに、放恣的意思とか空幻的實在なるものを失し來り、舊哲學は此處に至り終らざるを得ず、もとより之にありては著しく先天的方法を使用せざる可からず、蓋し科學體統中最後に位し、爾餘の學に負ふ處最多ければなり、此にありて然るに、又一方には之に加ふるに、觀察法わけては歴史的方法に由りて、親子的關係を明にす。斯くして普遍的論理的見解が普遍的科學の見解と隨伴するを見る。

是は之れ實證的方法の五期にして、之に由り科學的精神が漸次哲學的となり、遂

に曩時存したりし兩者間の假時的區別を去るに至る。

第十四章 實證的教義の結果が其準備的

時期に於ける評價

もとより科學的結論は論理的結論程に重要にもあらず又擴大にもあらず、蓋し彼は未だ成らざる知識體系に關すればなり、併し吾人現在の立脚地は上述諸學を以て余の所謂教義の一體を組織する必要な成素として、之を解するが故に、是等諸學の本性及び其連結を叙し、以て先の論理的のものに次ぐを必要とす。

少くとも人類進化の場合にありては、吾人の知識と吾人の要求との間に自然的一致の存するを見る、吾人の到底抵る事能はざるなる知識は、唯吾人が空虛の好奇心を充すに過ぎざるなり、吾人は唯人間に關する現象の理法を知れば足る、之れは(一)人生の存在及び其行動を、(二)其不斷の影響が全體の行動に缺く可からざる要素たる一般の中者之れなり。分れて二となる、(一)有機的、(二)無機的之れなり。其前者は後者への準備となるに過ぎず、前者に屬するものは、數學、物理學及び化學とし後

者は、個人と社會と爲す。

數學は總てのもの、中最簡單にして最普遍的のもの、其幾何學形式、次では其機制的形式を以てして、吾人の視覺を以て討究するを得る幾多の事件の唯一の證左となるもの、之れ數學が實證哲學中他のものに優れる處なりとす、其結果とする處は論理的法則を得るにして、之れ無くば物理的法則亦之を知るを得ず。

先に天然法則は運動及び均勢の基礎にして、之れと其れよりして生ずる成果は生物の器械的現象にも之を應用するを得るを見たり。吾人は更に一步を進めて、社會現象にも應用するを得るを見んとす、之れが第一としてケプラー法則即ち物は妨害を受けざる限り其状態を保持せんとする性質あり、個人の如きは物的現象に於て既に習慣性のあるあり、社會の如き之れより變化乏しく其持久性の一層永きものなれば、此法則の行はるゝや無論の事なりとす、彼の政治組織が如何のものも出來得る限り其を永からしめむとするにても知らる可し。第二のガリレオの法則即ち全體の共通運動と特殊的部分運動との間の調和之れなり、各部は其獨立の運動を有すると同時に、全體を通じて或運動の存するを見る。此事は有機體無機

體とに論無く存する現象なるが、社會現象にも亦之れあり、各部皆同一の進歩の度にあらずとも、全體をして一の進歩に向ひあり。

運動の第三法則、即ちニュウトンの原動と反動の同量なるに關しては、他の二者に優りて顯著なるものあり、之を稽ふるに、此現象は物理界、化學界、生物界及び社會界に通じて之れある處のもの、抑も純正器械學は此三法則に基く處のものなるが、總ての現象に通じて適用し得可き一般法則のみ、更に之を進めてはダロムプールの運動と均勢の一般法則に歸着せしめしものとなるを見る可し、即ち靜的と動的との關係にして動勢の中に調和の存するを見るなり。此くの如く吾人の知識體系は、論理統一の事より別にして、又科學的統一の存するを知る、後者もとより前者と全く一致する處あるにせよ、彼此獨立のものたるなり。

數學は之れ抽象的のものなるが、天文學に至りては、其普遍性は之れと劣らぬが、或媒者を示すあり、即ち星辰現象に用ゐしもの、併し又一方よりして之を見れば、媒者にして一般的性質のものならば、即ち抽象的にして不變のものたるむには、依然具體的のものたらずとの事あり、天體を見るに此くの如きもの存す。天文學に於

ては、數學的思辨が初めて實驗的に用ゐられしものなりとは云へ、尙ほ又一方には其抽象的性質を失はず、宛かも其關與する物體が其理以外の態度のあり得ざるものゝ如し。

物理學にありては、一層複雑なる新行動の存在を見る、物理現象は物體を通じて存在するもの、然かも其表現に至りては、種々複雑なる事情の綜合を爲すあり。而して、斯學は化學と化學と並び有機的諸科學との間の連結を附するもの、之に由りて初めて、完全なる段階を形成するを得るなり。

化學に至りては、無機界の中にありて最密邇の最完全の討究を爲すものから、之を有機的のものより分つの事難事に屬する位なり、諸現象は皆相違ありて之等を程度の名に歸着す可くもあらず、斯くして其現象の愈々複雑となり、愈々特種的となるに及びてや、益々之れが變態の高まり來るを見る、即ち實驗に由りて研究せんとするは之れが爲めなり、物理に比して一層生物學に近接しあり、以上數學より初めて化學に至る迄無機界のものを見たり、以下有生的のものを考察せむとす。其學たるや、社會學に負ふ事多し、蓋し爾餘の學の物理若しくは哲學等の侵寇に對し

獨立の地位を保ち得るは之れ之に負ふ處尠からざる所以なりとす。

個人的有機體より更に之を擴げて、集合的有機體の研究に至らむか、之れ終極に達したるもの、社會學即ち之れなり、其複雑の度に於て在來のものと異なるは、固より其處なりとす、其範圍續々擴大する事並に其生命の殆んど恒久なるは之れ社會有機體の特色にして、普通有機體と著しく異なる處なりとす、其人生全體を取りて考察するに至りては、愈々之れが特色を見る、之を論理的に見れば、個人的討究は其研究一代に限るを以て親子關係の事はあづからず、又科學的に之を見れば、之れ亦同様に、個人的生活の研究は其れ丈に限りて其繼續的のものを知る可からず。斯く二者の別明かなるものから、後進の學は尙ほ既存のものゝ爲めに壓倒せらるゝの傾向あり、蓋し是等のものは、蚤くに其實證的時期に達しあればなり。併し社會學成立するに及び、社會的思辨の他に優れるものなる事、在來兎角に神學及び形而上學の討究せる處の無益なりし事を示すあり、其未だ初期に屬すものから、實證性の充分に發現せざるは止むを得ざる處なりとす。社會學が幾多の科學に由り與へらるゝの利益は尠からざるものあれども、就中生物學に負ふ處の最多大なるは敢て

説くを要せし。殊に家族的狀態を明ならしむるものは之にして、此事は個人的生活と社會的生活の中間に位するものなり。

夫れ社會は極めて複雑を免れずと雖、克く其連關する處を示して以て、其困難に酬いしめて餘りありたり、其合理性は他のものに優り、其集合的精神を明にして、以て在來の諸學に本來なりし分裂的傾向に反動を加ふるを得たり。

斯くして科學的評價も將た又論理的評價も完全に達し共に同一の結果となりしを見たり、ペーコン、デカルトに由り提出せられたる、久しく且つ困難なりし準備も茲に終を告げぬ、皆新哲學の降生を整へしなり。扱此哲學の行動が今日余の人類進化的に由り確め得らるゝ限り如何を見んとす。

第十五章 實證哲學の究竟的行爲の評價

古往今來革命の中にありて、實證哲學の建設に由りて爲されし程人生を變態したるものある無し、今之に由りて將に來らむとする新生面を次の四點より觀察せんとす、曰く科學的寧ろ合理的、曰く道德的、曰く政治的、曰く美的之れなり。

第一實證的時期は最完全なる智的統合のものにして、是れ迄最完全に組織せられし人心にも猶見る能はざるものなり、多神教的組織の時に於て人類思想が同形的宗教的狀態を呈したる時の思辨的統一は、個人若しくは近邇の事實に關する觀念の自發的實證性のものよりして不斷の阻害を受け、スコラ時期にありては其調和に最近きし事も、唯之れ不定不完全なる均勢に過ぎざるなり、而して現今の過渡期は三個の共立せざる體系の下にある如き矛盾を包含す。總ての思想が完く實證的にして少しも他のものゝ雜る事の、無き調和を考ふるは不可能たり、唯之れは、常識が是迄或部分的の實用に限られしものが、遂に思辨的方面の領域を悉く有したるの時を想へば、此時を察するに難からじ、吾人近邇のものゝ一般知識は之を有す、吾人は吾人の知識討究を吾人の到達し得る事物に限り、而して人智の比較的性質なる事を知らば、其知識討究は謬無く愈々進歩して、吾人能力の極致に至りて止まらむ。吾人は未だ完全なる實證的方法を以ても自然法を討究せず、在來の神學的並に形而上學的知識の妨害を受くるあればなり、今日の現状を見るに此哲學に由りてより僅か三百年を経ざるものから、未だ以て進歩の完きものあらざる

は止むを得ざる處なりとす。其如何程迄之を爲したるかは次の順序にて之を見んとす。(一)抽象的思辨(二)具體的討究(三)實際的思想之れなり。

抽象的科學に在りては合理的方法を定めしより充分の討究を遂ぐるを得可し、社會學的精神起りて科學的のものを遂行し、現象の各階級を一組の理法を以て連結せむとの無用の努力止まり求むる處の統一は、理法の諸階級のもの、一致に由りて生ず、斯くして各部皆其範圍の事を爲し、其方法に於て相類し而して其歸趣する處に於て一なるあり。

既にベーコンの示したるが如く、抽象的科學は、第一位を占めざる可からざるのものなれども、直接に具體的科學を建設するの事は、新哲學の主要なる職務にして歴史的知识に由り繼起の状態を明にして以て之を得るなり。此くの如くにして行動の總ての種類に通じて其根本法則に關し知識を得るの外に特に他に得る處のものありて、わけても最複雑の現象に關する處のものなりと爲す、即ち事物の存續期にして、殊に人類發達期に關してのもの之れなり、人類の發達未だ準備的時期を過ぎざれども、尙幾百年に亘りて進歩的のものたらむ、其れ以上の思索は之れ不

合理のみ。吾人の新哲學に由り、舊哲學のもの、如く人類の無限に進歩あらしむるを得るとの事を否定するも、尙ほ社會の進歩を圖るを勉むるを失望す可きにあらず、其久遠なる彼方にある運命に就きては、今敢て呶々す可きにあらず。今日の實際的知識は思辨的見解と實際的のものとの一致よりして生ず、由りて一方には合理的實證性の上進の下に愈々進む可く、一方には又科學的進歩が既存せる思辨的斷片的状態に優るを證せむ。實に此時にありては、行動と豫想、換言すれば、實際と理論とが併せて自然法を其基礎として相連結し、由りて新哲學を普及するあり。事の愈々複雑となるに従ひ受感性を加へたるを以て、思辨と行動との關係は、人類状態並に其進歩に關するものに至りて最密邇なりとす。

道德的行動に關しては、其が智的のものと對抗するは之れ單に假時的のもの、社會學の見解が眞正のものとして建設さるゝや、直ちに壞敗に歸せむのみ、道德が社會の見解を爲して以て其科學的昂進を爲すの傾向あるは明々掌紋を指すに似たり、又實證哲學の特色とする集合的概念が論理的卓越を有するの事は亦同様なりと爲す。是れ兩者の合同を示すものゝみ、今日の如き混亂の時期にありては、道德

行爲の遂げらる可くもあらず、其行はる可きもの、遂に然かせられざるあり、此くの如くむば孰むぞ秩序を保持するを得可き、彼の根本的秩序の概念此大擾亂の中に之を見る。此時に當りて道德の智的統一を施して以て實際的行爲をして常に個人的のものに止まらしめずして、又社會的のものとならしめざるのみ。

道德は宗教的勢力の下には、益々實際的となるあり、個人的道德が、個人的思慮の束縛を脱し、總ての道德の根底即ち公德の基礎を爲すなればなり。人生の道德的並に科學的觀念は、益々人類をして高尚ならしむるものあり。總ての束縛を脱し生命の續かむ限り總ての方面に向ひて、其偉大性を發揮せむとす。

家族的道德に關しては、男女の性に由り並に其年齢に應じて從屬の關係あり、此處社會學と生物學と一致する處、高等動物に於て示す處のものを人に於ては完全に發達せしめしに止まる、之に由り社會一般の安寧は保持せらる可く、斯くして社會的生活の入口となるなり。

實證哲學は社會道德の眞正の見解を確めしもの、形而上學的哲學は利己主義を認め、神學的のものにありては、實際生活を想像的のものに從屬させ、此新哲學に於

ては、社會道德を以て其全體系の基礎とはするなり、在來の二者未だ以て利己的觀念を脱したるの行動に出づる能はず、此第三者に至りて初めて愛他的感情起り然かも其が克く恒久の基礎を占め得るなり。抑も哲學なるものは吾人の健全なる常識より出でたるもの、之れと離れたるものに至りては、もとより取るに足らずと爲す、然かも舊哲學に至りては之を爲さず、過去三百年に亘り、彼の未だ組織せられざる自發的常識の時に起るありて、此舊哲學の社會問題に侵寇するを防ぎ、以て調和を保持したりき。今日の實證哲學は益々個人をして、社會的關係に深きものあるを得しむるあり。

若し夫れ斯哲學が及ぼす政治的成果は此書に於て將來に關する論中に述べぬ、又近き將來のものは、第十二章に説くあり、今此處は精神的組織又理論的組織と世間的組織又實際的組織との分別の生長並に之れが適用に就き觀るあらむとす。

加特力教が此種の二重政體を示したるにして又斯教の制度が其と關聯せる哲學の不信に對し關る處あるなり。而して又心意統治なる希臘時代の理想國は近代の形而上學的哲學に傳來し、根底を据ゑ、遂に其妨害的勢力が吾人をして批評を

加ふるの好下物たるに至らしめぬ。今日の狀況にありては、現今文明の政體の要求する處物質的主權と智的主權の領域を明別するの念の存するを見る、其之を別ち其排列を定むるは將來の事に屬す、加特力教の別ちしものは、天國の利害と世界的利害所謂精神的と世界的のもの、別よりして、而して健全なる智的並に社會的評價よりしてにあらず、而して、世間的勢力の方、遂に天國のものに優り來るに及びてや、此分別の原理とする處も、基礎を危くし來りぬ、蓋し其を保持す可きの論理的基礎を缺けばなり。實證的方法を以てしては、此分別の最初期に溯り、社會的見解の科學的に又論理的に他より優れるものあるを知らば、道德を論ずるに當りても個人としてにあらずして、人生を主とするものなるを見む、そも道德律の事たるや個人としてよりは社會に於て評價す可きものなりとす、由りて常に道德と政治の二者の相連關しあるものなるを見る、而して此分別は理論と實際の別に由りて生ず、蓋し其各者になるは性質上夫々のもの、歸趣する處なればなり。此實證的方法に由り古代より中世に亘りて存したりし道德と政治の調和を爲すを得ぬ、之にありて理論と實際の二者併立し、夫々教育と行爲の方面を掌り、然かも其中に克

く調和を保持するなり、而して理論は常に實際に従ふ可きものたるを見る。

在來社會新組織を論ずるに當りては、常に歐洲五強國を以て其對象と爲したりき、蓋し神學的哲學の結果、之を致したるが、實證的學說行はれ、社會の有機説明なるに及びてや、此くの如きの偏見は打破せられざる可からず、先づ白人全體に及び、次では人類悉皆に亘るなり。實證的方法に由り社會の秩序並に其進歩を整齊す可し、蓋し智的並に道德的結合益々進み之を保持す可ければなり、然りと雖、尙ほ此二者の不整混亂のものを處理せざる可からざるは、もとよりにして、漸を趁うて、其秩序を保ち來るとなり、其結果人を導きて人類に最適合たしる社會組織に至らしむるなり。

實證哲學の指導の下に其所說、道德制度を遂行するに當りて之を表現するの樣式の如何は頗る重大なる關係の存するものあり、即ち美的方面之れなり、是れは其心意の高卑なるに由り、或は之を昂げ或は之を慰むるものあり、是れが爲めには、之れが社會組織と密接に關係せざる可からず、而して是れ在來のもの、闕却せる處なりとす、私人的生活に關しての文藝美術は是れ迄多々ありしと雖、其公人的の

ものは材料に於て缺如するものから、之れあるを得ざりし、併し公人的生活亦之を理想するを得るのもの、抑も真と善は美を待ちて初めて最顯著なるを得るものたり、而して實證哲學に於ては此三に最便益たるを見る。哲學的眼光を以て達観すれば、新組織は以て計られざる材料を近代の文藝に供するを得るものなるを見る。哲學の勞苦して得たるものを文藝美術に由りて普及するあり。之れ獨り詩歌にてのみ然るのみにあらずして、其他の美術に於ても亦同様なりとす。

以上の大過程の五成素は夫々新組織に特殊の寄與を爲し、相結合して鞏固なるものあり。佛國は哲學及び政治に於て優り、英國は實物及び功利の事に熱心し、獨國は組織的概括に偏し、伊國は美術の天才を出し、西國は其個人的尊嚴と宇宙的同胞の念とを善く調和するあり。是等のものが自然に共働して、以て實證哲學が吾人を指導して、人性に最適せる社會状態に至らしむと謂ふを得可きなり。

コ
ム
ト
終

明治四十二年十月十四日印刷
明治四十二年十月十七日發行

哲學文庫コムト奥付

定價金七拾錢

著者 小林 郁

東京市神田區裏神保町九番地

發行者 會社資 富山 房

同所社長

代表者 坂本 嘉治 馬

東京市本所區番場町四番地

印刷者 久能 仵

東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷 會社 本所分工場

發兌元

會社資 富山 房

著生先藏雄内坪士博學文

倫理と文學

再版

菊判紙數五百六十頁全一冊 定價金壹圓五十錢 送料内地十二錢

本書は主として著者が中學教育時代の研究の結果を集めたるものにして、曩に出版せし「通俗倫理談」と相接す、其普通の倫理書と異なるは、其讀書推理より來れるもの少なく、實驗直覺に基くもの多きことなり。文學と實際倫理との交渉も亦之によりて窺ふを得べし、文章は平明暢達にして趣味に富めり。最も時勢に適切なる萬人必讀の金科玉條はこれ也。

通俗倫理談

七版

菊判紙數五百餘頁全一冊 定價一圓貳拾錢 送料内地八錢

本書は著者が専ら中學程度の少年の爲に物せられたる倫理談を輯めて一冊子となせるもの也。自序に曰く「世の少年が修身處世の上に何等かの參考たるを得んか、著者の本懐なり」と、されど世の倫理教育に従事する人々及修身處世の指針を得んとする人々は此機健にして時勢に適切なる本書に接せざる可らず。

房山富會社 田神京東 元行發

東京高等師範學校教授 文學士 吉田靜致先生著

西洋倫理學史講義

洋裝菊判全一冊 紙數六百九拾餘頁 定價金三圓三拾錢 小包料金拾貳錢

○西洋倫理學史の世に公にせられたるもの極めて少く、偶々之あるも翻譯書の教牙讀み難きものに非ざれば簡略要を盡さざるものみにして、未だ斯學研究者の希望を満足せしむるに足らず。本書は此缺陷を積年蘊蓄の斬新な持説を傾注して新に著述せしむるもの。論丁寧精細運筆輕妙その特言文一致體如何なる階級にも十分了解せしめんとの微衷に外ならず。惟ふに教育家哲學專攻者の座右の系統遷變を知らせんと欲する人士の精讀に値するもの也。

文學博士 遠藤隆吉先生著

四支那思想發達史

菊判洋裝全一冊 紙數七百餘頁 定價金壹圓六十錢 送料金十二錢

本書は祖先崇拜、姓の起原、祭天の俗等を討究して社會組織を明にし、黃老の説莊列の説、孔孟の説を始諸子百家の哲學を批判就中易の哲學及中世の記詳を極む近世は王陽明に至り進んで現今支那人の思想に論及す、材料豊富叙事精透、眞に

東京 富山 神田 房山 一元五金貯替振

著生先藏雄内坪士博學文

倫理と文學 再版

菊判紙數五百六十頁全一冊 定價金壹圓五十錢 送料内地十二錢

本書は主として著者が中學教育時代の研究の結果を集めたるものにして、眞に出版せし「通俗倫理談」と相接す、其普通の倫理書と異なるは、其讀書推理より來れるもの少なく、實驗直覺に基くもの多きことなり。文學と實際倫理との交渉も亦之によりて窺ふを得べし、文章は平明暢達にして趣味に富めり。最も時勢に適切なる萬人必讀の金科玉條はこれ也。

通俗倫理談 七版

菊判紙數五百餘頁全一冊 定價一圓貳拾錢 送料内地八錢

本書は著者が専ら中學程度の少年の爲に物せられたる倫理談を輯めて一冊子となせるもの也。自序に曰く「世の少年が修身處世の上は何等かの參考たるを得んか、著者の本懐なり」と、されど世の倫理教育に従事する人々及修身處世の指針を得んとする人々は此穩健にして時勢に適切なる本書に接せざる可らず。

房山富會社 田神京東 元行發

東京高等師範學校教授 文學士 吉田靜致先生著

西洋倫理學史講義

洋裝菊判全一冊 紙數九百九拾餘頁 定價金三圓三拾錢 小包料金拾貳錢

○西洋倫理學史の世に公にせられたるもの極めて少く、偶々之あるも翻譯書の教牙讀み難きものに非ざれば簡略要を盡さざるものゝみにして、未だ斯學研究者の希望を満足せしむるに足らず。本書は此缺陷を著者積年蘊蓄の蘄新な持説を傾注して新に著述せしむるもの。補はんが爲に、著者積年蘊蓄の蘄新な持説を傾注して新に著述せしむるもの。論丁寧細運筆輕妙その特言文一致體如何なる階級にも十分了解せしめんと欲する人士の精讀に値するもの也。勿論西洋倫理學の系統遷變を知悉せんと欲する人士の精讀に値するもの也。

文學博士 遠藤隆吉先生著

支那思想發達史

菊判洋裝全一冊 紙數七百餘頁 定價金壹圓六十錢 送料金十二錢

本書は祖先崇拜、姓の起原、祭天の俗等を討究して社會組織を明にし、黃老の説莊列の説、孔孟の説を始諸子百家の哲學を批判就中易の哲學及び中世の記詳を極む近世は王陽明に至り進んで現今支那人の思想に論及す、材料豊富叙事精透、眞に極む近世絶好の快著也。哲學、文學に志すの士は勿論、教育家、宗教家の必讀書也。

東京 神田 富山房 一元五金貯替版

文學博士 芳賀矢一先生著

國民性十論

訂正四版

日本國民性の長短を論破して痛切奇警。同胞の自覺を促して妙不可謂。蓋し青年の耽讀すべきものは、此書を措て他に何を求めんや。

好評又好評喝采聲裡初版再版
忽ちに盡く今度字句に修正を
加へて第三版を發行せり

四六判 頗美本
定價 七十錢
郵税 六錢

文學博士 有馬祐政先生著

日本國道論

牧野文大 野文大 野文大
佐々木伯 伯木々 伯木々

菊判紙二百七十七頁
定價七拾五錢送料八錢

日本魂、武士道、神道、心學及我國に同化したる儒教等を打て一彈とせるもの、教育に従事せるものは勿論我國體と相隨伴して精神修養に志すものは何人も再讀三讀せざる可らず。

發行元 東京神田 富山房 會社

最簡潔平易な心理學書

文學博士 元良勇次郎先生述

心理學十回講義

第七版
現今幾多の心理學書中獨り異彩を放てるものは蓋し本書あるのみ
洋裝菊判 全一冊
紙數二百四十餘頁
定價金六拾錢
郵税金八錢

東洋大學講師 中島德藏先生著

倫理學講義

第五版
諸先輩に共通なる一般的普通の心理を簡單に穩當に出來得る文明のみに我同胞の普通識にまで紹介するところが唯一の願であつた卓抜新奇此四字の形容詞は要求する權利のなからず、倫理學と日本人の普通識の間には、可成丈夫な橋を架したと許すならば、其れで自分は満足なのである(小序抄出)

菊判美本
全一冊
紙數四三六頁
定價九十錢
郵税八錢

文學博士 元良勇次郎先生著

訂正 倫理學 增補 版八

紙數四百八十八頁定價金壹圓廿五錢郵税八錢
斯界の泰斗元良博士が専心研究せられたる心理學を基本とし、傍ら東西諸大家の説を參酌し從來の誤謬を正し科學的に原理を説明せられたもの。引例は博士直接の經驗に出で、立論の嚴密なる、事實の精覈なる、一も間然する所なし。師範學校、中學校教員諸君は勿論、苟も世の教育に従事せる諸士必ず一讀すべき良書なり。

文學博士 桑木嚴翼先生著

倫理學講義 再版

菊判二百五十餘頁定價九十五錢郵税八錢
桑木博士が倫理學の大家として盛名あるは今更言ふを須ひず、博士が倫理學一般の要綱を網羅し、詳細明瞭に解説せられたるもの即ち本書とす。深遠の問題も複雑の議論も、極めて平易に解釋し去り、立論崭新、文字通俗、讀者をして一讀能く幾多の倫理問題に釋然たらしむ。斯學界の人々のみならず、苟も倫理道德を口にするもの、必ず披讀すべき良著なり。

富山房發兌

著大三の學哲洋東

文學博士井上哲次郎先生著

日本陽明派學の哲學

日本に於ける哲學思想の發展を組織的に叙述し評論を加へたるもの博士の此の三大著以外何の事にも已に五事の諸般、批判の妥當、世間自ら定評あり。宜なり出版以來三五年ならずして其版を重ねること既に六回に及びしことや、今や國光大に發揚し、歐米の學者亦漸く我國の強大なる所以を究明せんとし、東洋哲學の神髓骨子たる陽明學派、朱子學派、古學派等の根柢に向て其研究の歩武を進めんとす。惟ふに日本民族特有の精神の存する所、國民道德の淵源する所、變遷あり、來由あり、活動あり、靜止あり、一波一瀾、起伏重疊、研究又研究、維れ日も足らざるの感なくんばあらず。本書は是等の點に於て闡明する所多く、興味横溢の間に學者をして一道の光明を認めしむ。誠には世道人心を裨益し後人を警醒するに足る用の好著といふべし。曩に朝廷山鹿素行、中江藤樹、伊藤仁齋、山崎闇斎等に贈位せらる亦所以なしとせず。本書は能く是等碩學大儒の學說事蹟を詳述し讀むものをして感奮興起せしむ。就中山鹿素行の事歴に至ては世間其詳を盡せしものなし。本書は詳に其事蹟其著書其學說を掲げ之に對する批判並に素行關係書類を示し學說に於て武士道論は殊に其細を極め項を分ち目を分ち親切丁寧、素行の爲に約百四十頁を費す。要するに素行の事蹟の詳を盡し遺憾あるなきもの世間本書の如きなし。學者若し古賢哲の風乎音容に接し靈犀一點相通じ默識心契する所ある必ずや肉離り血通くの快感なしとせざるなり。世に讀者家請ふ一本を購ふて啓發自得する所あれ。

各書洋裝全一冊紙數各約七百頁平均●定價●陽明學派書圓四十錢●古學派朱子學派各書圓六拾錢各編寫眞版數枚背像筆蹟入送料各十二錢

日本古學派の哲學

日本朱子學派の哲學

坪内博士序文の一節……「希臘神話はバーナツサスの山腹に野生して亂れ咲ける無數の花弁に比すべし。泰西の名ある文藝にして此花の蜜によりて醸されざりしもの殆ど稀なり。はるか後代の詩人藝術家とても大抵一たびは狂蜂となりてこゝに遊べり。希臘神話を閑却するは西洋文藝の大半を閑却するにひとし。代水君の此篇ある所以なるべし……西洋古文學研鑽の枝折として讀むべく、新しき詩材として讀むべく、趣味高き童話としても讀むべし。」

杉谷代水先生補譯

希臘神話

發兌元 東京神田

會社資 富山房

版四

東京朝日評……此書は彼の有名なるポルドウインの「希臘古譚」を譯して先づ神話の有の儘を紹介し、之に歐洲の神話學者の諸説を涉獵して一篇毎に(補)を加へて宗教哲學の研究に資し、尙(註)を挿んで讀者に便する所譯者の態度の最も眞摯忠實なるを知る可く、眞面目なる研究の結果として大に譯者の勞を多とし世人に推稱するを辭せざる也……

やまと新聞評……代水氏の此著は希臘神話を傳ふるに適する迄に其文章に力を用ひたりき。讀過するに當り興味と知識は一時に享受し得らるゝは著者の勞からざりしを察せしむるものあり。此好著の現はれしを喜ぶと共に著者の勞を謝し、併せて文藝家及讀書子に一讀を奨む。人々！自然派非自然派の議論は暫らく止めて、豊富なる希臘神話の果實を摘まずや……

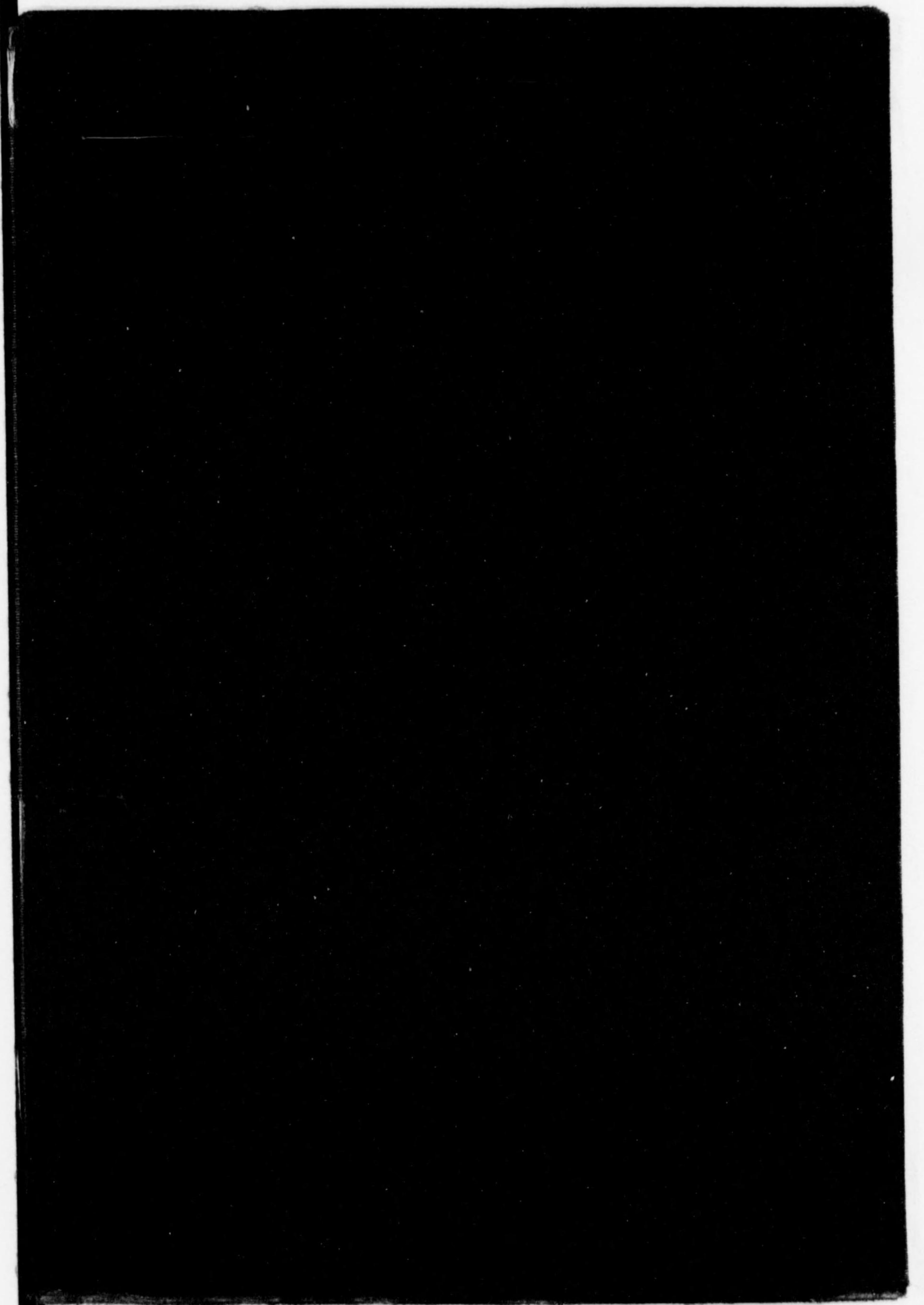
坪内博士序文の一節……「希臘神話はバーナツサスの山腹に野生して亂れ咲ける無數の花弁に比すべし。泰西の名ある文藝にして此花の蜜によりて醸されざりしもの殆ど稀なり。はるか後代の詩人藝術家とても大抵一たびは狂蜂となりてこゝに遊べり。希臘神話を閑却するは西洋文藝の大半を閑却するにひとし。代水君の此篇ある所以なるべし……西洋古文學研鑽の枝折として讀むべく、新しき詩材として讀むべく、趣味高き童話としても讀むべし。」

裝釘最優雅菊判四二六頁泰西名畫廿餘枚入定價一圓五十錢送料内地十二錢

房山富會社 田神京東 元行發

78
48

2





007882-000-8

78-48

コムト

小林 郁/著

M42

AAA-0052



